

整理番号

A II - 3 4173

標題名

鳴く虫の研究

著者名

西村醉夢（真次）

製作年月

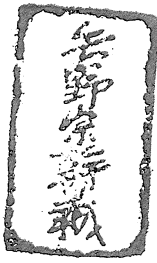
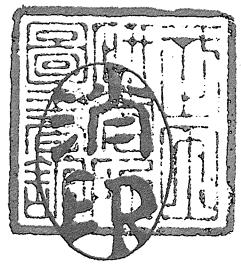
2012年3月

西村 醉夢 著

鳴く蟲の研究

東京 參文 舎





自序

自分は文學者の卵である、これから孵化して蛹となり、幼蟲となり、成蟲となつて大に活動しやうと思つてゐる。然るに或る動機から昆蟲の研究を始めた、友人は皆な自分に忠告して、「そんな拙らぬことは廢せ。」と云つたが自分は「由來日本の文學者は科學的知識に缺け、科學者は文學的趣味に缺けてゐる、これ文壇の一大缺陷だ自分は鳴澁がましいが此の小研究によつて、科學と文學との調和を計つて見る積りだ。」と云つて、其の後にも研究を繼續し、遂に此の書を著は

すに到つたのである。一部の『鳴く蟲の研究』、若し自分の精力の餘裕あることを示してゐるならば、自分はそれで満足である、敢て無趣味な科學者に對して戰鬭を挑んだ譯ではない。終に臨んで、自分は『日本昆蟲學』の著者たる松村博士に、貢ふところの多いのを謝する。

明治四十年七月三十日

著者 識









鳴く蟲の研究 目次

第一章 緒言.....一

一、研究の動機.....一

二、科學と文學の調和.....三

三、昆蟲美論.....五

四、研究の範圍.....一五

第二章 昆蟲の鳴聲.....一六

一、昆蟲の發聲器.....一六

二、鳴く目的.....二〇

三、蟲聲の詩的價值.....二四

第三章 螽斯科.....二九

一、總説.....二九

二、キリギリス.....三三

三、オカマニホロギ.....五〇

第四章 蟋蟀科

四、	クツラムシ	五五
五、	クビキリバツタ	六三
六、	ウマオヒムシ	六四
七、	ヤブギリ	六八
八、	ツユムシ、ヒゲナガササキリ	六九
九、	イブキギス	七〇

一、總説

二、	コホロギ	七三
三、	エンマコホロギ	八六
四、	クサヒバリ、カンタン	九〇
五、	ミツカドコホロギ	九八
六、	カネタタキ	一〇二
七、	マツムシ	一〇五
八、	スズムシ	一一〇
第五章	蝗蟲科	一一九

一、	總説	一九
二、	イナゴ	二一
三、	コハネイナゴ	二九
四、	ハタチリ	三四
五、	ツチイナゴ	三七
六、	バツタ	三八
七、	クルマバツタ	四二
八、	ヒシバツタ、ノミバツタ	四四
第六章 満洲の蟲		
一、	序言	四六
二、	促織(キリギリス)	四七
三、	烟々(クツロムシ)	五一
四、	尿吮螂(マグソムシ)	五四
五、	片擔勾(ハタチリ)	五七
六、	蝶(テソ)	五八
七、	蟋蟀(コホロギ)	六一

八、 螞子(バツタ).....	一六四
九、 三叫驪(ヤブキリ).....	一六五
一〇、 蝗螞子(イナゴ).....	一六五
一一、 螞螂(トンボ).....	一六六

圖畫目次

表紙圖案(金屬版)草葉と蟲(谷朱冠).....	
扉圖案(木版)もろ蟲(同上).....	
口繪三色版(蝨蠅科)の棲息狀態(同上).....	
挿畫(寫眞版)蟋蟀科の隠れ家(同上).....	
挿畫(寫眞版)蝗蟲科の棲める田園(同上).....	
説明圖(西洋木版)合計三十八個(村越三千男).....	
一、 線の按配.....	七
二、 美術の粹.....	八
三、 エンマコホロギの頭部.....	一〇

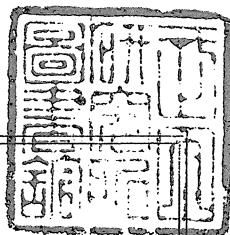
四、	アゲハテフ……………	一一
五、	蟬の發音器(十七年蟬)……………	一七
六、	キリギリス前翅(發音鏡)……………	一七
七、	コホロギ前翅……………	二〇
八、	キリギリス……………	三四
九、	同上尾節、前肢、觸角……………	三五
一〇、	オカマコホロギ……………	五一
一一、	マダラカマドウマ……………	五五
一二、	アメリカのクツワムシ(Kalydia)……………	五六
一三、	ゴアゴア(蠅々)……………	五七
一四、	クツワムシ前翅(發音鏡)……………	五九
一五、	ウマガヒ……………	六五
一六、	コホロギの生態……………	七三
一七、	コホロギ……………	七四
一八、	同上前肢、觸角……………	七七
一九、	コホロギ右前肢と發音器……………	八五

二〇、	エンマコホロギ	八八
二一、	クサヒバリ	九〇
二二、	カネタタキ	一〇二
二三、	マツムシ	一〇六
二四、	マツムシ右前翅	一〇七
二五、	スズムシ	一一一
二六、	クマスズムシ	一一七
二七、	ケラ	一二八
二八、	イナゴ	一二三
二九、	蝗の腹部	一二四
三〇、	コハネイナゴ	一三〇
三一、	ハタチリ	一三四
三二、	バツタ(卵塊、幼蟲、成蟲)	一三八
三三、	クルマバツタ	一四二
三四、	滿洲の蟲籠	一五三
三五、	キマツリ	一五四

目次終

三六、	ミドリシジミ	一五六
三七、	ヘニシジミ	一五九
三八、	ウチワトンボ	一六六

謹んで此の書を、姉上および、伊勢山田に
在るわが母校、厚生尋常小學校に捧ぐ。



鳴く蟲の研究

西村 醉夢 著

第一章 緒言

(一) 研究の動機

幼時の追懷

面白かりし過去の追懷は、終生人を華やかなる幼年時代に戻らしめる。ウ
オツヲウスも云つたやうに幼年時代は『牧場や、杜や、流水や、此の下界も、あら
ゆる尋常の現象も、奇しき精靈の光りに包まれて、宛ら夢裡に見る如く、清く
尊く鮮やかに見える』ものである。自分は思想の泉の涸れ、感情の火の消えた
時々、何時も幼年時代の追憶に耽るが、かくする毎に、清新莊麗の情想が、胸
を衝いて湧き出るのである。而して追憶の中最も愉快なものは、姉と共に
虫を捉へ、虫を飼つた事である。姉は實に自分に取つては、慈母とひとしき恩

人であり、虫は亦た朋友とひとしき好伴侶であつた。優しい姉を想ひ出すと同時に、親しい虫を憶ひ起すのは自分の癖で、姉と自分と虫とは、前世から何等かの關係があつたやうにも思はれる。

好奇心

こんな次第で、自然、虫といふ事に向ける注意が深くなり、それに就いて多大の興味を感じるに従ひ、好奇心も伴つて、一つ研究して見やうと云ふ氣が起つた。それは五年程以前のことである。兎角する中、日露戦争が始まつて、自分は補助輸卒に徴發せられ、瘦せ腕に車を曳いて、滿洲の曠野を縦横に駆け廻つてゐたが、索莫たる四邊の光景は自分を傷ましめるのに、道端の草葉にすだく虫の聲のみは、いたく自分を慰めて呉れたので、その恩に報ひる爲め、滿洲の虫を天下に紹介しやうと思つたのが、昆虫——殊に鳴く虫の研究の途に上つた最近の動機であつた。

素人としての研究

併し自分は科學者でない、文學者たらんとの志望を懷いて、果てしなき研究の旅路に彷徨つてゐる身の、逆も専門家のやうな研究は出來ないけれども、爾うするのは却つて自分の本志でない。自分はアマツチュアとして鳴く

虫の研究をするのだから、科學と文學との調和を圖つて研究の上に一新生面を開かうと思つたが、それすら梟の宵工夫よひだくみに終りはしまい乎と、心配しつつも研究を續けて、遂に本書を草するに至つたが、これはほんのお見本で、更に深く深い研究を累ねて、最つと完全なものを出すことがあるかも知れぬ。

(二) 科學と文學の調和

科學と文學とは、氷炭相容れざる性質のものでない西洋の科學者の文章などは、實に巧みなもので、その中には文學趣味が溢れん許りに充ちてゐる。然るに日本の科學者と來たら、全で學問の團塊かたまりか何かのやうに、科學ばかり便つて面白くない文章を書くで、その著述を見ても直ぐ倦いて了つて二度と讀まうと思ふやうなものはない。デ、ケインシイも云つたやうに『科學は敎ふることを目的とし、文學は感動せしむることを目的とする』ものであるが、その間に調和が取れないと云ふ理窟はない。

志賀矧川氏の『地理學講義』や『河及湖澤』、瀧川氏の『はな』松村博士(任三)の『普

通植物』丘博士の『進化論講話』などは、輒近數年間に於ける科學書中で、最も多く文學趣味に富んだものである。こんな風に一面教へ、他面動かすと云ふ事は、決して不可能のことではない。科學も解し、文學も解し、知情二つながら具足する冷頭熱情の人があつたならば、よく此の企畫を遂げるに相違ない。いくら科學だと云つて、乾燥蠟を嚙むやうな文章で書き記されては、讀むものは興味を感せず、従つて直きに倦き果て、了ふから、教へると云ふ目的をすら果すことが出來ない。これに反して溢るゝ許りの趣味を持たして置いたなら、讀むなと云つても讀者は讀む、一度で倦き足らず二度も三度も繰返して讀む。さあ此うなると、單に動か、しめ、許りでなく、自から教へる譯になるのである。卽ち科學と文學との調和は、一時に二重の目的を遂ぐる勘定で、讀者も亦た大なる利益を享くる譯である。

知情の調和

自分は科學者でないけれども、普通の智識は具へ度いと思ふのみならず、文學の上に於いても科學との扞格を防がうと思つてゐる。一言に縮めて云へば、文學と科學との調和を計り、一時に *To move and teach* 兩様の目的を遂げ

やうと思ふ。わが國のも、詩人には、科學上の普通智識の缺けた者が多く、従つてその作物には五月蠅うるはい程多く、科學と矛盾したことを書いたのがある。早い話が、朝雨霽はられて、虹が東へ現はれたと書く、文學上では虹が西へ出ようと、東へ出ようと、そんな事は少しも構はないけれども、科學上から見れば朝の虹は決して東へ現はれるものでない。若し爾んな叙景を見たら、中學生などは嘲笑つて卷を捨てゐるに相違ない。これは眞の一例に過ぎないが實際科學者は文學的趣味を解し、文學者は科學的智識を持つことによつて、此の如く見苦しき缺陷を補ふことが出来るのである。自分は此の『鳴く虫の研究』を公刊するに當つて、及ばずながら文學と科學との調和を計つた積である。無論科學者でないのだから、その方面の智識に缺如たる所はあるだらうが、處々文學的趣味の湛へられてゐること丈は、自認することが出来る。

(三) 昆虫美論

美學の範圍は頗る廣い、個々から見れば天地間の森羅万象は、悉くその

研究の主題である。ひとり月のみならず、花のみならず、路傍の雜草も、川底の小石も、人の五官の感覺し、人の腦髓の考へ得る所のものは、皆美學上から研究することが出来る。故にかの昆虫も亦た美學上から、何故に美とせらるゝ乎如何なる點が美であるかと云ふことは出来る。で、自分は茲に昆虫美學と云ふものを建設しやうと思ふ。

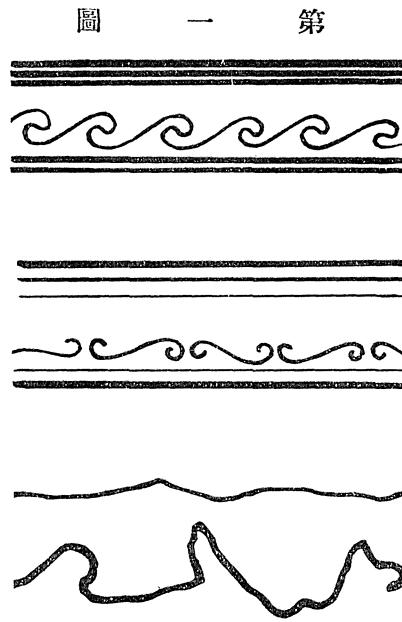
美の成立

吾々が松虫なり、鈴虫なりの聲を聞いて、吁美くしい音色だと云ふのは、慥かにその美を感受したのである。然らばその美感は何から成立してゐる乎と云ふに、第一は對象、第二は感受の内外兩側から成立して居る。前の例について云へば、松虫の聲そのものは、美感を起さしめる材料、即ち對象であるし、その對象に對して吾々が聴取上美だと感じた感情は、即ち感受なのである。それ等の悉しい議論は、審美學にエッセチックス譲ることとし、自分は此處に、昆虫美成立の外的要素たる對象、即ち昆虫に就いて一言し度いと思ふ。

昆虫美は(一)形狀、(二)色、(三)聲、音の三つから成立する。けれども本書はシンセング鳴く蟲の研究を主とするが故に、重もにその聲音に就いて述べやうと思ふ。

(第二) 形状(Form.)

形状の上から見れば、虫の形は様々であるから、一概に何が美で、何が醜だと云ふことは出来ないが、美醜の分るゝ原因は、空間即ち線の按配(第一圖)に

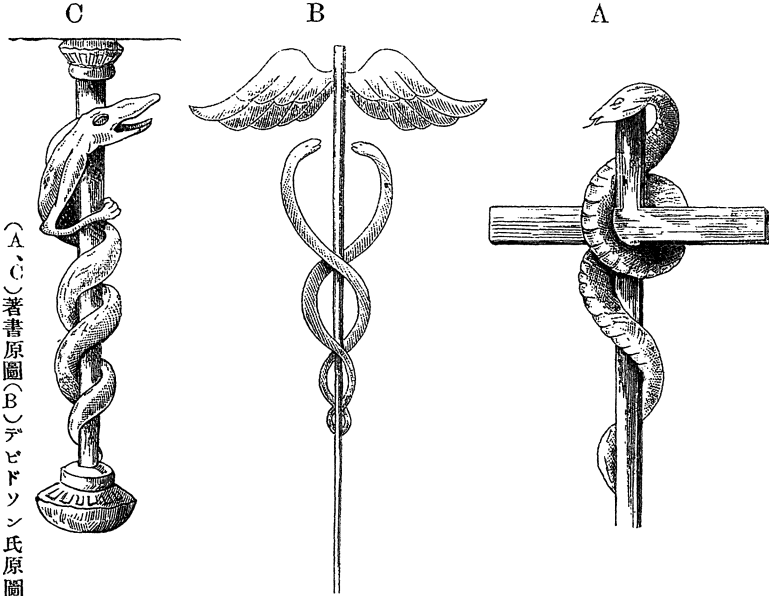


線の按配著者原圖

あることは云ふ迄もない。一例を引けば、圓美な曲線は人に快美の感を起さしめるけれども、いやに屈曲したギザギザなどは不快感を起さしめる。むづかしく云へば、均齊(Symmetry)だとか、參差(Variety)だとか種々な難かしい科語

があるけれども、つまりは調和の取れてゐる事(Harmony)統一のある事(Unity)が美感を起させる原因に成るのである。一切の藝術は、形、色、聲を題材として作られるが、彫塑は形、繪畫は色、音樂は聲を主とし、文學は時間空間の兩面を

第 二 圖



(A、C)著書原圖(B)デビッドソン氏原圖

美 術 の 粹

包合したものを作ることが出来る。

昆虫は概してその形が短小であるから、觀照上、弱し、優しとせられ、従つて可憐の感を起させる。繪には随分書かれてゐるが、それは形よりも、寧ろ色が主にされてゐる。形を主とする彫塑に現はれた昆虫は、實に少ないのである。西洋などでは虫の彫塑を裝飾に用ゐることもあるさうだが、それは重みに爬虫類で

ある。かの十字架にからまつた蛇(第二圖A.)や、カヂュシアス(Caduceus)(第二圖B.)は、曲線と直線とを配合した美術の精華である相だが、それは獨り西洋のみならず、支那にも存在してゐる。障壁面に於ける龍や、佛壇の支柱に刻まれた蛇(第二圖C.)などは、慥かにその一種なのである。然るに昆虫は形小さく、剩さへ翅や脚や頭や尾やが複雑なので、彫塑の材料としては適當でない。一例せばキリギリスの細い脚や、肢やは、到底彫刻することが出来ないのみならず、した處で決して見榮のするものでない、利口な美術家はこんな不都合なものを材料とせず、どしどし他の方面で自分の天才を發揮しやうとする。して見ると昆虫の形狀の美は、たゞ繪畫に現はれるか、詩文の上に現はれて來る許りである。

(第二) 色彩(Colour.)

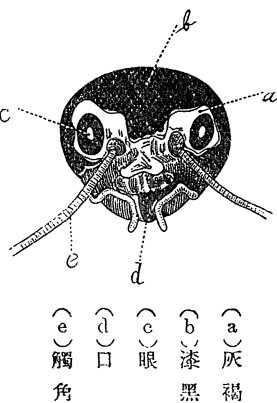
色彩の上から見ると、昆虫は随分美くしいものである。昆虫は各々保護色を持つてゐる。常に草叢に棲息するものは綠色を帯び、土中に棲息するものは褐色を帯ぶと云ふ風に、それゝ自己の生存狀態に適した彩色を帶んで、

他の強大な敵から迫害を免れやうとしてゐる。故に虫自身から見れば、その彩色は美でも何でもなく、たゞ實用上の必要に迫られたもので、妙齡の婦人が紅紫黃白の着物を着飾るのと譯が違ふけれども客觀的に人間から見ると、其色彩の配合は慥かに美感を起させる。**エンマコホロギ**の漆黒にして光

エンマコホロギの頭部

第三圖

著者原圖



(a) 灰褐

(b) 漆黒

(c) 眼

(d) 口

(e) 觸角

輝ある頭(第三圖)は、眼元に少許の灰褐色を帶ぶる事に由つて、吾々に美しくいと云ふ感じを起させるし、**キリギリス**の中の**アフ**は、淡褐色の中に光輝ある綠色を抹してゐるに由つて、一入奇麗に思はれるのは、皆色彩の配合按排が巧みにせられてゐるからである。之に反して**マツムシ**の如きは、聲は別問題として、その色彩ばかりを見ると、地味で、沈鬱で、厭な感じをさせる。由來茶褐色は、しぶさの美を持つてゐるけれども、紅の熱烈や、青の沈靜や、緑の希望やに比べて、人を牽引することの少ないのは、今更に喧ましく言ふ

光澤

昆蟲と繪畫

までもないことだ。

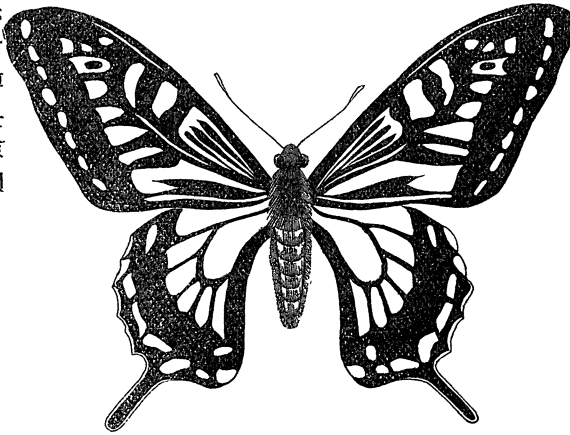
色の美を補ふものは光澤である。光澤の有無によつて、色そのものの性質に變違を來す譯ではないが、これあるが爲め、平面の滑らかさを想像することに由つて、美感に強弱あらしめることは、動かない事實である。それは濃黄色と金色とを比較して見れば分る。昆虫の中、最も美麗な色彩を有してゐる蝶類(第四圖)の翅は、彩色の複雑な配合が吾々に快美の感を起させるのに相違はないが、他面その輝かしい光澤のあるにも原由するとは、誰しも考へ得可き事なのである。

色彩と最も密接な關係を持つてゐる

藝術は繪畫である。日本では虫は屢々繪や圖に描き出され、その美しい天

第四圖

松村博士原圖



然の色彩は、畫家の手腕によつて想化され、花鳥獸、虫と並び稱せらるゝ程重要な畫題に成つてゐた。西洋では比較的に少ないやうであるが、これは小さな、優しい、箱庭的の優美(Beautey)を寫さうとし、彼は大きな、強い、大洋的の崇高美(Sublimity)を描かうとするのが常であるから、此んな結果が現はれたのである。東西繪畫の比較論はさて措き、昆虫殊に鳴く虫の中で、最も多く畫題にされるものは、セミ、イナムシ、キリギリス、スズムシ、マツムシなどであるが、これは云ふまでも無く、みな人の知る所である。

(第三)聲音(Voice.)

昆虫殊に鳴く虫の價值は、その鳴き聲に在る。虫の鳴聲は、音樂上どれ程の價值があるか、又た音樂と何んな關係を持つてゐる乎は、頗ぶる研究に値する問題である。日本人は一般に、虫聲を悲しいものゝやうに解し、その悲哀、性ばかりを認めてゐたが、虫聲は果して悲哀なもの許りであらうか、活潑な、愉快な、勇壯性のものはないであらうか。コホロギの低い、細い、顫へ聲(The low, slender and trill voice)と、キリギリスの高い、鋭い、太い聲(The loud, sharp and sig-

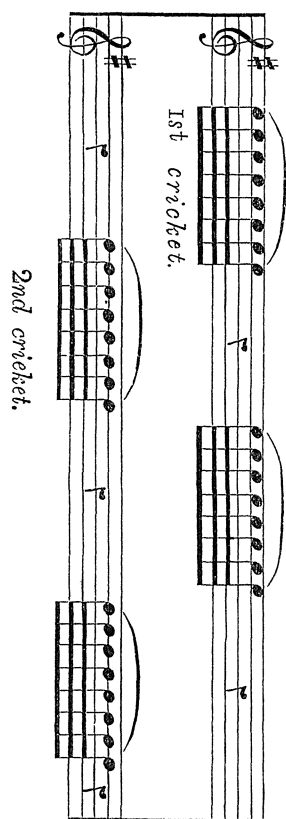
us, no voice.)との間には、人の感動に差別あらしめる程の異點がないであらう乎。自分は思ふ、虫聲は各々、異つた性質と、異つた調曲とを以て、慥かに個々異つた感動を人に與へるに相違ない。忙がしげに鳴くクツワムシと、哀れげに鳴くコホロギとの間には、非常な相違がある。又單純な蝗の聲と、複雑なマツムシの聲との間には、音樂上の價值の相違がある。それに『もろ虫の聲ぞかなしき』などと十把一からげに言つて了ふのは、甚だ不修理な譯である。

虫聲の音樂的價值は、その律、格的 (Rhythmical) なるや否やで決せらるゝ、言を換へて云はゞ調子 (Tone) の整つたものが最も價值の多いものだと云ふことが出来る。また虫の聲は、その儘寫して譜に作成し、音樂と見ることが出来るやうか。日本の現今行はるゝ唱歌などで、鳥獸、虫の聲を擬したもののは、例へば鼠は『ちゆうくくく』と云ひ、鴉は『かあくくく』。鈴虫は『りんくくく』と云ふ風に、低々昂格を繰返すに過ぎない。けれどもヘルズオーグの『杜鵑と蟋蟀』と云ふボルカ曲の如きは、小品ながらも複雑なもので、ボルカの上に杜鵑と蟋蟀とを點出し來つて、秋の夕べの寂寞を現はしてゐる。殊に一種特別なる

蟲聲の樂譜

樂器の使用によつて、鳥聲と虫聲とを、寫實的に擬聲したのは、音樂界の珍とする所である相だが、これは確かに虫聲と音樂との、調和の可能なことを、證明してゐる譜曲だと云つても可い。

自分は始め鳴く虫の研究をなすに當り、虫聲を樂譜に採らうと思ひつき、これこそ確かに新發明である、先人未發の工夫であると、自惚れて鼻を高くしてゐたが、豈圖らんや西洋人はずつと昔に注目してゐた。マシウス氏などは、大抵の鳥や虫の鳴聲を譜に作つた相だが、トリ、クリケツトなどは、随分美しい啼き聲を出すと見え次のやうな譜曲が示してある。



これ單に律格的だと云はれる許りでなく、拍子があると云ふことが出来る。こんな風に一切の虫聲を研究し、その固有の特質調子等を調べて見たら、随分面白からうと思ふ。兎に角、虫聲と音樂との關係は深くして且つ重要だと云ふことが出来る。ワグネルや、ストラウスのやうな大天才が幾人もく現はれて、虫聲の美を理想化する時の來ることを、自分は渴望して止まぬのである。

(四) 研究の範圍

鳴く虫といふと、其の範圍が甚だ廣い。けれども自分は、虫全體に渡つて研究してゐるのではない。昆虫の中のキリギリス科、コホロギ科、イナムシ科の中、鳴くものゝみに就いて研究してゐるのだが、それでも虫の數はなかく多く、加ふるに採集が一地方に限られ、一季節に限られてゐる者が多いので、痒い處へ手の届く程充分には行かぬ。況して自分は専門學者でなく好事家として研究するのであるから、各虫發育の順序、例せば卵子から蛹、蛹から幼

虫、幼虫から成虫と云ふ風に、一々詳細な科學的研究を試みる事が出來ない。殊に自分の企圖は、如何なる程度まで、科學と文學との調和が出來るかと云ふ試験をするのであるから、文學的價值のない處はどしどしと捨て、詩的なこと計り書き綴つたのである。で、自分は緒言の終に於いて、本書が昆虫學の書物でないことを讀者諸君に告げて置き度いと思ふ。

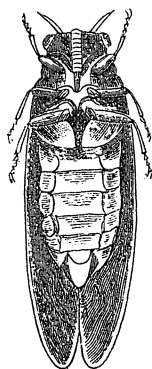
第二章 昆虫の鳴聲

(一) 昆虫の發聲器

蟲の鳴聲

昆虫の鳴聲は、鳴くと云ふよりも、寧ろ鳴ると云つた方が適當であるけれども、發聲の機械を持つてゐる以上は、鳴くと云ふのに差支はない。人でも鳥でも獸でも、鳴く場合には常に口を使用するけれども、昆虫に限つて、決して口を用ゐない。昆虫の鳴聲には完全な發音器によつて發せらるゝものと、翅又は翅と脚との摩擦によつて發せらるゝものとの二種ある。何れにしても發聲器の機械的作用で、鳴くものには相違なく、只だ完全と不完全との差違が

蟬の發音機



蟬年七十

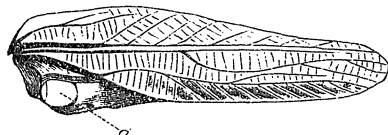
著者原圖

あるのである

昆虫の中、最も完全な發音器を持つてゐるものは蟬である。蟬の發音器(第五圖)は腹部に在つて、人がそれを壓へてもジイ〜

と鳴るのは誰も知つてゐる所だ。次は蝗類、螽蟴類、蟋蟀類であるが、**ケツワムシ**、**キリギリス**、**ウマオヒ**の如きは、右前翅に發音鏡(第六圖)と云ふものを持つてゐる、その發音鏡が左前翅に觸れると、相摩して様々の音色を發するのであつて人間が發聲機關を動かすのと同じく、少しも違つたことはない。蝗虫には二種あるが、一は翅と翅とを打ち合はして音を出し、一は翅と脚とを摩擦せしめて發聲する。その他茶柱虫は大腮を他物に摩擦せしめ、**バツタ**は大腮と大腮とを摩擦し、蜂、蚊、蠅などは翅が空氣と摩擦することに由つて、個々の音色を出すのである。**ケ**

キリギリス前翅
(a)發音鏡



松村博士原圖

レイの『悲歌』中に、

Now fodes the glimmering landscape on the sight,

And all the air a solemn stillness holds,

Save where the beetle wheels his droning flight.

And drowsy tinklings lull the distant folds;

(今や朧ろの景色も見えずなりて、

四邊は嚴かに静まり渡りつ、

時にその沈黙を破るものは飛、び、交、ふ、甲、虫、の、羽、音、と、

草屋にひしく眠たげなる鈴の音とのみ。)

とあるのは、翅を空氣に摩擦せしめて發聲する甲虫のことを謳つたのである。また自分の個體を摩擦して變な音を發する蟻のやうなものもあるし、頭部と胸部とを接觸せしめ、彼此相摩擦することに由つて、發聲するものには**コメツキ、カミキリムシ**などがあるけれども、要するに發聲機關は概して不完全で、他の動物に比較すると、劣つてゐるやうに思はれるのである。併しその音色の優れたものは、非常に持て囃されて、風流韻雅の士の尊重する所とな

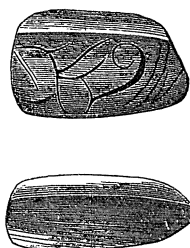
るものも少くはない。

虫によりて鳴く方法こそ異なれ、その發音器は何れも雌雄淘汰の結果として現はれたものである。で、發音器を持つてゐるものは、雄虫に限り、雌虫はこれを所持してゐない。故に鳴く虫は雄に限るのである。あの**アフラゼミ**の雌の鳴かないのを、啞だと云つて、小兒は喜ばぬ傾があるのを見ても、發聲機關の雄虫のみに具備せられてゐることが分る。何時かも石川博士の云はれた様に、人間はよく女が泣くのであるが、虫はそれと正反對で女は泣かないで男が泣く、鳥でもそうで女よりは男が鳴く。昔しギリシャの學者は、

“Happy creatures ! thy females are deprived of voice !”

と謳つたが、げに此の言葉の通りに、虫はその雌に於いて鳴く聲を奪はれてゐるのである。若し虫の妻に悲しい事、辛い事があつたなら、彼の女は何うしてその切なる心を、夫に訴へるであらう、誠に氣の毒な話である。自分はよく喋舌り、よく泣き、よく拗^すねる婦人の舌を、せめて半分でも雌虫に與へ度いと思ふ。餘談はさて置き、雌虫の鳴かないことは、**コホロギ**の前翅(第七圖)を調べ

コホロギ前翅
↑
♀



著者原圖

べきものかも知れない、男女同權と云ふことは、慙うなると少し疑はしい問題である。

談話は扱措き、今まで陳べた如く、虫は雄ばかり鳴き、雌は鳴かないものであるが、それは何の爲めに啼くのであるか、又その啼くのは如何なる場合であるか、それは研究を要する問題である。

(二) 鳴く目的

鳴く目的

虫の鳴く目的は何であるかと云ふに、概して異性を戀ふてゐる。人間は

第七圖

重もに悲しい時に泣くものであるが、虫はそれと違つて妻を戀ふる時に鳴くのである。昔から詩に『妻戀ふ小男鹿の鳴く聲聞けば……』と云ふやうな句があるのは、事實に適つてゐるのであるが、猿丸太夫の、

奥山に紅葉踏み分け啼く鹿の

聲きく時ぞ秋はかなしき

と云ふ歌のやうに、鹿の啼聲を聞いて悲しい聯想を起すのは、詩としては兎も角、理窟の上では間違つてゐる。虫の聲、雁の聲などは、支那や日本の詩人には、悲哀なものと斷定せられてゐるが、これは大きな間違で、實は妻戀ふ聲なのであるから、楽しく、浮々してゐる筈である。で、虫の聲は、これを、戀の呼出 (Amorous challenge, or amorous invitation.) とでも云ふべく、人間で譬へて見ると、生若いハイカラ男が美しく着飾つて、女たらしの甘ツたるい聲で、『あゝお嬢さん、此方へ來ッしやい、』とか『僕は貴女を愛してゐます。』とか云ふやうなもので、何も悲觀すべきものではないのだ。モウバツサンの小説『田舎娘』(“The farm girl.”)の中に、

見渡すと鶏は水蒸氣立ち騰れる塵溜ちりだめの上に寐そべつてゐるが、その中の或る者は爪で四邊を搔き散らして、頻りに虫を探してゐた。その時誇らしげに立ち上つた雄鶏は、誘ひ出すやうな艶めかしい聲で啼いて牝鶏の周圍をくると廻つた。牝鶏は飄乎ひょうこと起ち上り、足で身を支へて翼を伸し、ぱたりと羽叩をしたが、又た元の塵溜の中へ歸つて背伸をした。同時に雄鶏は是れ見よがしに元氣よく啼き立てたが、界限の農事場にある雄鶏も、これに應じて啼き立てた。恰度農事場から農事場へ、仇ッばい戀の呼出を掛けてゐるやう。

とあるのは、即ち鳥や虫の鳴くのは、一種の Amorous challenge だと云ふことを示して餘地あるではない乎。

鳥獸の鳴聲

草原でキリギリスの啼いてゐる處へ、人間がゆくと直ぐ鳴き聲を止める、ひとりキリギリスのみならず、大抵の虫は物音を聞くと發聲を中止するが、鳥や獸やに成ると、恐怖心を起した時、歡喜の念の充ちた時にも鳴く。元より尋ねることは出来ないのだから、その鳴く目的は推測であるけれども、虫で

蜜蜂の歌

も決して戀の呼出ばかりではないやうだ。かの蜜蜂などは、愉快な時、敵を威す時、不幸を感じた時などにも啼く相だが、言語として虫の鳴聲を見ることが、頗ぶる困難である。けれども御伽噺の作者が、

“[Dear me! Dear me!”

Buzzed a little bee,

“I’m always making honey.”

『あはれ、あはれ』

小さな蜂は呻るらく、

『われは常に蜜をつくる。』

と謳つた如く、職蜂が花粉や花蜜を集める際にぶツ／＼と呻る聲は、如何にも愉快らしく聞える。して見ると或は専門學者の云つたやうに、不幸な時には特殊の聲を發し、外敵を防ぐ時には威嚇するに足る大聲を出すと云ふことがないとも限らない。俗に云ふ**カフトムシ**が、子供の捕へにゆく時に、ぶうんと呻つて飛び去ることのあるは、誰しも能く知つてゐる所である。

蟲聲の詩的
價值

西洋人の蟲
聲觀

(三) 虫聲の詩的價值

以上は科學的研究であるが、詩的に考へて見ると、虫の聲を樂しいと解し、悲しいと解するのは、聲そのものの本質にもよるだらうが、重にも詩人その人の聯想が大なる原因であるらしい。日本人や支那人はキリギリスや、コホロギの聲を聞くと、悲しいことを聯想し、『きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしき一人かも寐ん』とか『草虫鳴何悲孤雁獨南翔』などと謳ひますけれども、西洋の詩人は虫の聲を聞いても、別に悲しい、哀れな、泣き度いやうな思ひはしないやうである、キイツの『蟋蟀と蝻蜥との歌』(“On the grasshopper and cricket”)や、ウオーツオースの『呼子鳥に寄する歌』(“To the cuckoo.”)などを見ても、日本人のやうに悲しみ歎いてはゐない。或る西洋人が京都にゐて、暮鐘の聲を聞き、『何たる樂しげな響きぞ!』と云つた相だが、日本人は鐘聲は始めから悲しいものとして、遺傳的にその音色の悲、哀、性を認めるから、それが先入主になつてゐて、到底もそれを樂しいものと思ふことが出來ないの

である。これと同じ理窟で、日本や支那の詩人は、先人の作詩をオーソリチイとして、虫聲は始めから悲しいものゝやうに思ひ、どんな場合にもその快、樂性は認めることが出来ないものである。新日本の詩人は、須からく虫の音の樂しき部分を謳ふべきである。

音樂上、音はバス(Bass)、ソプラノ(Soprano)、アルト(Alt.)等に分たれてあつて、其高低、強弱、振顫などによつて、性質上樂しいものと、悲しいものとの區別はあるが、虫の聲などは概して之を聞く人の心持で、悲喜兩様に聞き倣されるのである。故に虫聲に對する感情の大動因は、常に吾人の聯想の中に存在してゐると云つても可い。例へば悲しい時に虫の聲を聞くと、それはさも哀れに濕ッぽく聞き取られるけれども、樂しい時に聞くと、何となく娛しげに聞き取られると云ふやうな風に、吾人の心持次第で何うにも聞き取られるのである。故に人間の境遇と云ふものが、虫聲の解釋と大關係のあると云ふことは、拒むべからざる事實である。吾が國の詩人の如く、冥想詩は其處除けにして、感境詩許りを作つて満足してゐた連中の作には、深い思想を伺ふべくも

卽興詩

あらぬけれども、試みに歌集を繙いて見ると、虫についての歌の殆んど總ては、境遇に感じた卽興的(Impromptu)のものが多く、虫聲を悲しと解し、樂しと解するのは、重もに聽者の心持、境遇によると云ふ吾人の説を證するのに、非常に好都合である。

君玄のぶ草にやつるゝ故郷は

まつ虫の音ぞかなしかりける

ひとり寢の友には成らできりぐす

なく音を聞けば物思ひそふ

露はおき風は身に沁む夕暮を

己がときとや虫の鳴くらむ

など皆その例で、一は故郷を忍び、二は一人寂しく寝ね、三は風露寂しき夕景の時に歌つたもので、何れも悲哀的境遇だと云ふことが出来る。こんな時には虫の聲を聞かすとも心それ自身が既に悲しいので、樂しい樂の音を聞いても悲しく、寂しく、哀れに思はれるかも知れないのである。

蟬の聲は騒がしいものとして、『蛙鳴蟬噪』など云ふ熟語が作られてゐる程であるが、人によると『ひぐらしの鳴く山里の夕ぐれは風より外に訪ふ人もなし。』と謳つて、それを寂し味の記號としてゐる。蜜蜂の呻り聲は、概して勤勞と云ふ意味に解せれてゐるやうであるが、尙ほ『不平』若しくは『歎息』の意味にも聞き取れないことはない。小兒の歌ふ蜜蜂の歌に、

“No time to play,

But work all day;

Isn't it very funny,

Very, very funny?”

と云ふのがある、これは蜜蜂自身の言葉として綴つたもので、その表彰する意味は勤勞の満足である。——少くとも楽しい側の意味に解したものである。けれどもマツムシやスズムシの聲は澄んでゐて、清冽、尖鋭、人の耳底に徹する概があるから、これを蜜蜂など、同一に語ることは出来ぬ。人若し松虫の聲が遽だしいからこれを勤勞の意味に解しやうとしたら間違ではある

クツワムシ

あはれさ

寫聲

まい乎。秋の昆虫中、クツワムシの聲は、その噪急なる點に於いて、その顫振し翳濁せる點に於いて、やゝ蜜蜂に近いから、時としては忙がしくあはたしく、勤^{いそ}しむと云ふやうな感を起させることがある。これ等に比べると、スズムシと、カネタタキと、チャタテムシは、其音の間隔^{レスト}、調子^{トーン}、性質^{クオリティ}が遙かにあはれさ(Pathos)に富んでゐるやうに思はれる。キリギリスと、ウマオヒとは聲調はい相同じく、コホロギは、聲調低く、弱く、人の心を暗いゝ、低いゝ冥府へでも引き入れるやうに思はれることもある。キリギリスの啼くのは、大抵晝間であるけれども、コホロギの鳴くのは重もに夜間に於いて聞かれるから、一入寂しく、あはれに感ぜられるのであらう。

虫聲の形容詞に、『蟋々』と云ふのがある、これは清音で *Dziden* と發聲し、『唧々』は *Chieh* と發音し、『曲々』は *Chuichui* と發音するから、日本でキリギリスを『きいす』と呼び、ウマオヒを『ちよんずい』と呼ぶが如く、頗る寫聲的(Onomatopoeic)で、形容の眞を盡すことが出来るのである。けれども、これを日本のやうに『しよくゝ』又は『きよくゝ』『じゝ』などと發音しては、薩張り台無しに成

るのである。例の漢名『蝨蠹』などは、馬追のことを云つたのではあるまい乎、此の字は清音では Tongtsu と云ふから、馬追の啼き聲 トンズイを取つて、寫聲的に名詞としたものであるまい乎。由來名詞には寫聲的のものが多し。現に日本でも **ギイス**、**チンチロリン**、**チヨンズイ** など云ふ俗名があり、支那でも『曲々』とか『蝸々』とか云ふ俗名がある、これは言語學者の研究すべきことで、自分等の研究範圍外であるけれども、一寸と思ひ付いた儘を記したのである。

第三章 蝨蠹科

(一) 總說

キリギリス

キリギリス科(*Locustidae*)は、**コホロギ科**、**イナムシ科**と共に、**直翅目**(*Orthoptera*)に屬してゐる。由來直翅目に屬してゐるものは、咀嚼に適した口と、等しからざる二双の翅を具へてゐるが、前肢は硬化して腹部の上方を蔽ひ後翅は柔軟な膜狀で縦にたゝむことの出来るやうに成つてゐる。觸角即ち俗に所謂髭は、絲狀若しくは鞭狀を呈してゐるが、眼は大抵複眼の外、別に單眼を有

し、前胸は自由自在に動かすことが出来る。此の種の雄虫は、發音機關を具備してゐて、ゆく秋を聲を惜まずに鳴くのであるが、雌虫はそれを持つてゐないから、常に沈黙を守つて、子供等に啞だゝと輕蔑されてゐるが、その代り雄にはない産卵管と云ふ立派な機械を持つてゐるものも有る。直翅目の昆虫は、大抵は食草性で、草葉や瓜やを食つてゐるけれども、大きな形の物の中には肉食するものもある。

觸角、翅

キリギリス科は、直翅目に屬してゐるから、以上の條件に相違した處はないが、觸角は鞭狀をなして體よりも長いのが多い。さればこそ歌にも、

きりぎりす觸^ひ角^りの長夜は明^ひけそめて

歌にもだえし若^{わか}う人^{ひと}ねむげ

食餌

とある。眼は概して單眼を缺き、翅は前翅に於いて透明な發音鏡を持つてゐる、これが他の**コホロギ**科に屬する鳴虫との差點である。跗節はすべて四個、前脛節に小さな聽器を有し、物音を聞き分ける。食餌は無論、草葉草根菓瓜であるが、中には食肉性のものがゐて、小動物を食ふことがある、口は**コホロギ**

保護色

生殖の経過

蠹科と蠹
蟻科との比

科などよりも發達してゐて、咀嚼力強く、時としては友食ともぐみを始める。

飼ふまじや友食ひ破るきりぐす

と云ふ俳句は、その間の消息を歌ひ出で、妙を極めてゐる。

キリギリス科に屬する昆虫は、常に叢間にゐるから、自然はそれに保護色を與へて、緑を以て翅や軀やを染め、鳥類を始め他の優勝なる動物の害を防いでゐる。此の科の中には晝夜を分たず鳴くものもあるが、晝ばかり鳴いて夜は餘り鳴かぬ者もある。産卵期は千草の葉が枯れ萎んで、冬近き寒風にざわ／＼と鳴る頃である。卵子は臀部を地中に突き込んで産むが、長らくの間地中に藏せられ、翌くる春、溫かい日がぼか／＼と照らす頃に成ると、孵化して幼虫となり、それから幾變轉して遂に成虫となり、秋が來ると時を得顔に喧ましく鳴き立てるのである。

試みに**キリギリス**科を以て、**コホロギ**科に比べて見ると、前者は**男性的**で、後者は**女性的**である。前者は花やかに緑の衣を着け、勇ましく、男々しく、晝間はヒヨコ／＼と草叢、木藪を飛び歩き跳ね廻つてゐるけれども、後者は地味

樂天家

な黒褐の喪服を着け、溫和しく、女々しく、晝間は土石の下に隠れ、何處やら臆病に、おづ／＼しながら夜を鳴くのである。キリギリスでも、クツワムシでも、ウマオヒでも、此の科に屬するものは皆比較的に活潑な、勇壯な、太い聲を持つてゐるけれども、コホロギでも、クサヒバリでも、スズムシでも、コホロギ科に屬するものゝ聲は皆な柔しく、細く、哀ッぽいやうに思はれる。何うしても前者は男性的で、後者は女性的だと云ふ事は免れない。

で、自分は、キリギリス始め、此の科に屬する虫類を見聞すると、彼等は樂天家である、人と言ひ現はせば華々しい武士(Knight)のやうなものであるが、コホロギ科のものは概して厭世家で、人にたとふれば僧侶(Monk)のやうなものであると思ふ、で自分は何方かと云へば、女々しいコホロギを捨て、男らしいキリギリスを採り度いと思ふが、彼等は皆よく跳ね、よく躍つて、なかく自分等の手に捕へられない。乃で自分はシェレイと共に、彼等に贈るに "The unbounced youth." 『不羈倜儻の壯者』といふ仇名を以てしやうと思ふのである。

(二) キリギリス

キリギリス

俳諧
歳時記
萩草

キリギリスは漢名を蝻蜥と云ふ、原語では *Platycheilus Bonneti*, *Boliv* と云ひ、キリギリス科の代表的昆虫である。今のキリギリスと云ふのは、昔これをハタオリと云つたものだ相なが、この眞偽は分らない。例の馬琴の著はした『俳諧歳時記萩草』には、

六月の中より鳴き初めて、七月中ごろまで野叢の中晝盛んに鳴く、その聲ギイイスといふが如し、一二聲の中にチヨンと舌打す、俗これをキリギリスと云うて、小籠に入れて市に賣りて、小兒の翫びとす、その形蟲イナゴに似て大なり、是れはハタオリなり。ギイイと云ふは機躡オナギの音、チヨンは箴打オサつ音なり、又たギスとも云へり。

と書き、字は『絡線蟲』と云ふのが當てゝある。果して支那の促織オナギが、日本のハタオリだとしたならば、和漢その名を一にしてゐると云つても可いが、秋田地方では馬追蟲ウマオヒムシのことを、ハタオリと呼んでゐる。殊に漢詩の中にも、

名稱の辯

明月皎夜光。促織鳴東壁。

と云ふ文句があり、**キリギリス**は夜鳴かぬものだとしたならば、今の馬追蟲こそ、昔のいはゆる**ハタオリ**ではあるまい乎、して見ると馬琴の見解は間違つてゐると云つても可い。尤かも促織は清語で、*Tsuzumi* と呼び、今の**キリギリス**のことを、**ツウズイ**と呼んでゐると、さる

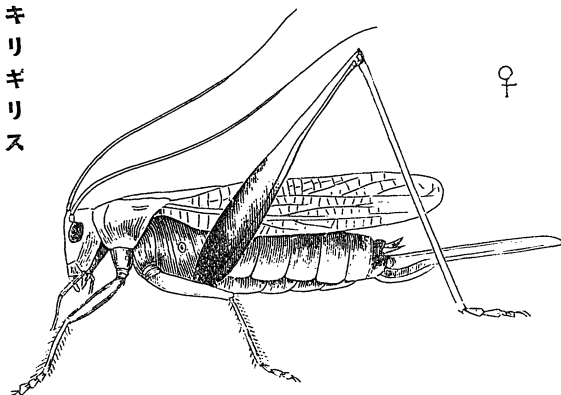
土人は云つたが、無論確實ではない。又た**ツウズイ**と云ふ音は、頗ぶる**ウマオヒ**の鳴き聲に似てゐるから、或は**ウマオヒ**蟲の事を云ふのであるかも知れない、此の點に關しては自分は明確な判斷を下すことは出来ない。

キリギリスの形(第八圖)は、**ハバツタ**と均しいが、その頭部は非常に違つてゐる。頭は光つて、小さく、觸角(第九圖)長く、前翅に小

その形状

第八圖

キリギリス



著者原圖

さな聽器を有し、翅は前翅硬化し、後翅軟かく、その色は二色ある、一は綠色、一は褐色で前者は普通キリギリスと呼び、後者はこれをアフラと呼んでゐる。何れも前脛節の上部に沿うて、三個の刺を有してゐる、『和漢三才圖會』の記す所によれば、

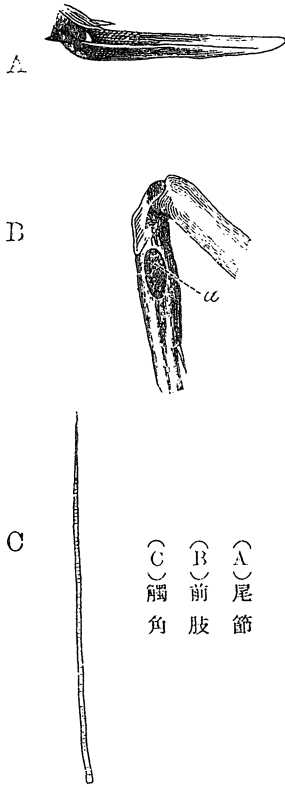
按莎雞青色者多、褐色者少。蓋褐色似麻油、故俗名油莎雞。阿不。聲最亮清爲珍。養之樊中、用甜瓠李或錫砂糖水。冬亦能防寒。則經數年、其聲如言木里岐里須。故名之。一二聲而如鼓舌。雌肥大善鳴。

とある、嘘言うそと眞事まこととを搗き交せて、まことしやかな事を云つてゐる。殊に滑

シネル氏原圖

(a)聽器

第九圖



(A)尾節

(B)前肢

(C)觸角

稽なのは、『雌肥大善鳴。』と書いてあることだが、實際昔の辭書などは信を措くに足らぬものが多い。前にも少し述べて置いたが、**キリギリス**の聴器(第九圖)は前肢にあるが、頗ぶる少さくて、一寸と見ても分らぬ程だ、尾節(第九圖)は少々尖銳にして尾端に斗出してゐる。

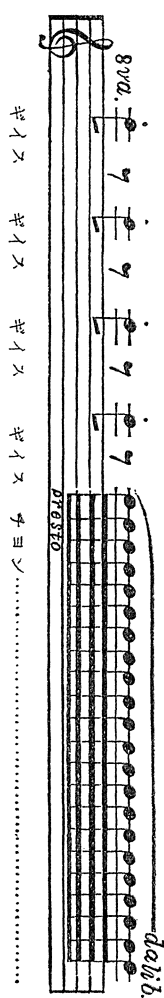
英國のキリギリス

英國では**キリギリス**の事を *Meadow Grasshopper* と云ひ、矢張り小音樂者として、趣味を解する人に喜ばれてゐる。さる人の著述の中に次のやうな事が記してあつた。

牧場の草原に住んでゐる蟲で、ツリイ、クリケツトには少し劣るが、尙ほ美くしい音色を出す音樂者がゐる。それは**キリギリス**である。**キリギリス**は八月の暑さきびしき太陽の光の下に、ぎぶくじいと鳴いて吾等を惠む。その色は綠その觸角は長く、その足は紅い。身長は一インチ許、透明な翅を透して綠色の軀を見ることが出来る。双方の翅の肩に接した處は堅く、鳴く時にはそれを揚げて打ちふるふのである、すると鋭い、*Zigzag sound* を發する。

これを見ると、日本の**キリギリス**よりは、少しく小さいやうに思はれるが、大體に於いて異つた處はないらしい。

キリギリスは發音鏡を持つてゐる、それは右前翅に附いてゐるが、鳴く時はこれを左前翅に摩擦せしめるのである。その聲は他のに比べると明亮で、われらの耳にはギイス、ギイス、ギイス、ギイス、チヨと聞える。そのギイスと云ふ數は一定してゐないが、若干それを續けると、最後にチヨンと舌を打つやうな音を發する。



自分が曾て滿洲にゐた時、昌圖府附近の草原で、キリギリスの鳴いてゐるのを聞いたが、その聲はギイ、ギイ、ギイ、ギイ、ギイを澤山につけ、滅多にチヨンと云ふのを附けなかつた。自分は何故かは知らず、蠡蜥の鳴くのを聞くと、——その鳴いてゐる處には、昔し金殿玉樓があつて高い樓や、美くしい薨やが、雲を凌いで立つてゐたのであるが、時も人も世も變つて、遂に壞敗に歸し、礎石すらもなくなつて、かくの如く禾黍や、雜草やの繁るのに任してゐる。キリギ

琵琶湖畔の
懷古

キイツの詩

リスは廢屋や、廢園と、淺からぬ關係を持つてゐるんだ。——と云ふ様な感想が起る。自分の中學生時代のことであつた、近江に遊んで琵琶湖畔をさまよひ、土地の人から「あの邊が舊都の跡だ」と云ふのですが、確とは分りません。」と教へられた時、四邊の畑には**キリギリス**が眠たげに鳴いてゐた、日の光は鋭く照らして、草葉は萎まん許り、暑さは却々厳しい事であつた。それからして自分の胸中には、**キリギリス**と、舊墟との間には、暗黙の關係が結びつけられてゐるといふやうな思想が常に潜んでゐるやうに成つた。その鳴く目的は勿論、配偶を求める點に在るのだらうが、それは扱て措き、聽く吾々の耳には餘り樂しげには聞こえないのである。たゞ何となく熱心なやうには思はれるが、一面眠たげにも感じられる。**ジョーン・キイツ**の “On the grasshopper and cricket.” という詩は、巧みに**キリギリス**と、**コホロギ**の事を謡つてゐる。今こゝろみに其の一節をこゝに摘出して見やう。

The poetry of earth is never dead:

When all the fields are frunt with the hot sun,

And nide in cooling trees, a voice will run
From hedge to hedge about the new mown mead,
That is the Grasshopper's—he takes the lead
In summer luxury,—he has never done
With his delights: for when tired out with fun
He rests at ease beneath some pleasant weed.

(地上の歌は滅びざるなり。

衆鳥は暑さに負けて力衰へ、

冷やかなる樹の間に隠るゝとき、

牧場の籬に聲こそ聞ゆれ、

その聲は蝻蜋なり。蝻蜋は、

草木茂る夏の日に魁すれど、

そは喜びをもて鳴くにはあらざるなり。

蓋し彼戯れて疲れなば草葉の下に安らかに憩はん。

キリギリス
と炎天

げに此の詩は、キリギリスの鳴く時、處などを巧みに云ひ現はしてゐる。キリギリスは晝鳴いて夜はあまり鳴かぬ。頃は八月の炎天、畏日の光り鋭く照らして、鳥は風涼しき林の木の間に隠れる時、彼は離にすだきてギイスチヨンと鳴くのである。その熱情あるやうな聲と、眞夏の日光とは實によく調和してゐて、其處に一種の統一があるやうに思はれる。マウバツサンの『棄てられ人』といふ短篇小説の中にも、キリギリスを描いて、

夫人は泣き鳴咽しやくに息を塞がれて突然だつに立ち止つた。日光は目を眩するが如く、暑熱は人を倒さん許り、日盛りの谷間は最ど淋しく静かである。只だ、道の兩側の、疎らな、黄色い草むらの中で、翹うち振ふ螽斯の鳴き聲が聞える許り。

と云つてゐる、實際キリギリスと暑熱との間には一種の調和があるので有る。然るに日本の詩人は毫も之を謳つてゐない、由來日本詩人は泣き味噌が多い、彼れ等は常に弱い、細い、小さい、暗い處へ許り目を附けて、只だもう潜々と泣いてゐる許り、猛烈な日光、熱心な蟲聲などを謳ふ勇氣はなかつたので

ある。何等の愚ぞ、

草の葉や足の折れたるきりぐす

柴舟の碇おろせばきりぐす

促織や手はきかいても口拍子

などは皆な物に成つてゐない。玄かし寥松と云ふ人の句に、

荒磯や鶴眠らするきりぐす

と云ふのがある、これは實に名句で、豪壯、雄大な景色に、纖弱な一昆虫を配合し來つて、巧みにその鳴聲の有する特質を謳つてゐる。

蟋蟀別れて居れば鳴き交はす

きりぐす鳴くやいつまで瓜の花

などは、前者はその偶を求めて鳴くと云ふ科學的見解に一致し、後者はまた、その鳴く時節の野面の光景を活躍せしめてゐる。日本の詩に比べると、まだ『詩經』の方が餘程眞に近い。

蟋蟀羽詵々兮、宜爾子孫振々兮、

その特質

詩經

カウリイの
詩

螽斯羽。薨々兮。宜爾子孫。繩々兮。

螽斯羽。揖々兮。宜爾子孫。蟄々兮。

の句などは、幾分^{いふく}か、活潑な、男性的な、キリギリスを描き出したと云ふことが出来やう。**アフラハム**、**カウリイ**などは、**キリギリス**を以て幸多き帝王よりも幸だと云つてゐる。

Happy Insect what can be

In happiness compar'd to thee?

Fed with nourishment divine,

The dewy morning's gentle wine!

Nature waits upon thee still,

And thy verdant cup does fill.

'Tis fill'd where even thou doe'st tread,

Nature self's thy Grannie!

帝王より
多幸

藤村の詩

Thou dost drink, and dance, and sing;
Happier than the happiest King!

All the fields which thou dost see,

All the plants belong to thee,

All that summer hours produce,

Fertile made with early juice.

その朝の露をもて葡萄の美酒に比べ、蝨蝨をもて緑の盃と譬ふる所、實に千古の名句ではあるまい乎。殊に野や、草や、夏の日のあらゆる物をキリギリスの有と見倣し、彼を帝王よりも幸福だと斷定するところ、到底日本の *World* the poet の眞似すべからざる處である。

去年^{こぞ}薦の葉のかげにきて、

うたひ出でしに比ぶれば、

ことしも同じゑらべもて、

かはる節なききりぐす。

耳なきわれを咎めそよ、

嬉しきものと思ひしを、

自然のうたのかくまでに、

舊きゑらべとなりけるか、

同じゑらべにたへかねて、

草と草との花を分け、

聲ある方に立ちよりて、

虫の答へを求めけり。

花をへだてゝ君が爲め、

聞くに任せて歌へども、

歌の心のかよはねば、

背中あはせのきりぐす。

これは嶋崎藤村氏の『きりぐす』と題する詩であるが、『^{ニューデューカバリイ}新發見』を以て生命となし、常に斬新警拔な藝術を憧憬してゐる自分等には、毎年々々少し

も變らぬ**キリギリス**の聲を聞いて、此な感じの起らないこともない。それもさる事ながら伊豆山隨社の神樂歌に、

垣根に住むがきりぐす、燒玉の家を、かに申せ、囃せ、子供ら、榎木に住むは、玉むし、申せ、囃せ、子供ら。

といふのが有る相な、頗ぶる無邪氣で面白い。で自分はこれを材料として、**メイルヘン**を作つたら、面白い物が出來やうと思ふ、**アンデルゼン**や**グリム**等に全權を委任せず、新日本の青年は、恁う云ふ方面にも手をつけて貰ひ度いものだ。何時かも河井醉茗君が、虫に關するお伽歌を作つたが、實に無邪氣で、素樸でその單純な中に、一種の興趣を含でゐた。若し虫の議會でも描かうものなら、**キリギリス**は差し詰め、雄辯な議員にでもしなければ成るまい。緑議員が、色に關する動議の出した時に、綠色保護を主張すると、油議員が褐色保護を要求し、議長の轡虫博士が遂に綠色保護を可決したので、馬追や、**バツタ**やは喜び、**コホロギ**や、**ケラ**やは失望して、悲しい聲で泣き出したなどは、小兒に取つては随分面白からうと思はれる。『伊蘇普』の中には面白い物語が二篇ま

梟と蠹蜥

で載つてゐる。

梟と蠹蜥

木の洞の中に止つて、長い眞夏の午過を眠つてゐました梟は、草葉に群すだく蠹蜥の聲に夢を破られました。蠹蜥はその時、世の正直な者どもは、皆夜眠るく。と云ふ歌を歌つてゐたのです。

梟は姑らく黙つて聞いてゐましたが、やがて猫馴聲で蠹蜥に向ひ、實を云や、お前が喧ましいんで、私はむか腹を立てゐるんだ。私は歌なんか聞くよりも、眠つてゐる方が好なんだ。けれどもお前がそんな細い笛の音を出すので、何うしても眠られない。私は茲に甘いく蜜酒を持つてゐるが、それをお前に遣らうと思ふ、まあ此處まで來給へ、一杯やるから。これを飲むと美しい聲が出るよ。と申しました。

そこで蠹蜥は、ひよっこくと梟の側へ行きましたが、梟は直ぐ蠹蜥を捕へて食ひ殺しすやくと眠つて了ひましたとさ。

* * * * *

驢馬とキリス

驢馬とキリス

或驢馬がキリスの鳴き聲を聞いて、大變に喜び、己もあんな善い聲で歌ひ度いもんだと思ひました。で、お前さんの聲は大變に美しいが、一體どんな

物を食べてゐますか。」とキリギリスに尋ねました。

「はあ、私は露を食べて生きてゐます。」とキリギリスが答へました。

乃で驢馬は心を決めて、露を食べて居りましたが、直きに饑えて死んで了ひましたとき、人でも爾うで、立派なものを見て、すぐそれを真似やうと思ふと、此の驢馬のやうな馬鹿な目に逢ふのであります。

* * * * *

蟻とキリギリス

蟻とキリギリスとが、或る廣い野原に住んで居りました。蟻は冬の用意にと、食物を拾ひ集めるのに忙がしく、せっせと働いて、少しも遊びませなんだが、キリギリスはそんな事にはお構ひなく、毎日――遊び廻つてゐました。

やがて霜が降り出したので、蟻は仕事を休み、キリギリスも遊び歩かなくなりしました。或る冬の暖かい日に、蟻はその食物を日に干してゐましたが、恰度その側を饑ゑて死にかゝつたキリギリスが通り掛りました。

「蟻さん、今日は！お前さんは少し私に餌を下さらずにやうか、來年お返ししますから。」とキリギリスが申しました。

「お前さんは、自分の食べる餌を持つてないんですか、夏一緒に野にゐた時は、いくらも餌が有つたやありませんか。お前さん達は壯健で働き易いから、い

くらでも餌を取れる筈だが、一體お前さんは何うしてゐたの？」と蟻が尋ねました。

「え、夏が夏中、ひよこくと跳り廻つて、夜も晝も歌を歌つてゐましたので。」と空腹抱へて、キリギリスが申しました。

その言を述つて蟻は申しました。「夏が夏中跳り廻る程面白いら、冬も冬中跳つたり、歌つたりして過ごしちや何うです。」と、直ぐ彼方へ行つて、仕事をしながら歌を唄つてゐます、その歌は此う云ふのです。

「己等は蟻、蟻、蟻さまだ

蟻は借ること大嫌ひ。

己等は蟻、蟻、蟻さまだ、

蟻は貸すことも大嫌ひ。」

何方かと云ふと、キリギリスに取つては不名譽な話が多いのであるが、何れも無邪氣で、罪がなくて、子供々々した中に千古不滅の眞理が含くまれてゐる、これとは方面が違ふけれども、俗謡に、

聲はすれども姿は見えぬ

深山がくれのきりぐす

といふのがある。なか／＼面白い句であるが、或る人はこれを英譯してゐる。

Though I hear the voice [of the beloved]

The form I can not see——a kiriginu in the high grass.

只だ意味を傳へたと云ふ丈で、何うも神韻は消えて了つた。虫に關する童謠は、調べて見たら随分面白いものもあらうが、不幸にして自分は今まで多くそれに接しない。

キリギリス
の童謠

青ざいす、赤ざいす、

赤いのは雄オスで、

青いのは雌メスで、

赤いのが鳴くと、

青いのが跳る。

赤ざいす、何で鳴く

青ざいす呼んで。

青ざいす、何で跳とぶ、

赤ぎいす慕^して。

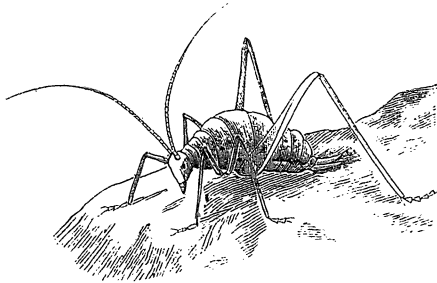
これは自分が試みに作つた童謡の見本である。古めかしい、六かしい雅言などを使つて、こちたき新體詩とやらを作るよりも、寧ろ、平易な、誰が讀んでも分るやうな童謡でも作つたら、それこそ人類の爲めに裨益があるであらう。玄かし童謡として、自分は一の制約^{コンデション}を置く必要があると思ふ。——それは童謡の目的は、小兒に歌はしめるのだから、出來得る限り科學の智識と撞着しないやうにし、小兒をして趣味を解するの力を養ふと同時に、智識の方面に於いても迷路に陥らないやうにしなければならぬ。讀者の中、心のあるものは、各自の地方に流行る童謡を集輯し、研究し、また自らも試作せられんことを希望して已まないのである。

(三) オカマコホロギ

オカマコホロギ(Diastrammena japonica, Burm.)は一名をイトドと云ひ、エノシタコホロギ又は、エビコホロギとも云ふ、松村博士は漢字で『竈馬』と書く所

から、カマドウマと讀ましてゐられるが、これは少し沒趣味な話だ。伊勢の方
言では、オカマギイス、九州では井ヒゴと云ふ相だが、悉しいことは知らない。
某英文學通と虫の題目で話をした時に、詩に“Cricket on hearth,”と云ふのは、
恐らくオカマコホロギの事だらうと云はれたのを記憶してゐるが、眞偽は
知らぬ。

第十圖



著者原圖

オカマコホロギ

オカマコホロギ(第十圖)の形は、頗ぶる車鰯に類
してゐる、全體赤褐色で、後肢はいと長く、長刺を
有してゐる代り、翅もなければ聽器もない。跗節は
側偏で、背部は^{せむし}僂のやうに突起し、平圓形を描い
てゐる、口も他の虫よりは細長く、頗ぶる醜い顔付
をしてゐる、人間ならば賣れ残りの娘といふ格で、
いくら^{ひいき}眷顧目に見ても美くしいとは云へない。け
れども、そのヒョコ／＼と飛び歩く様は、實に
いちらしい物である。夜間はよく屋内を飛び廻り、

俳句に現は
れたる竈馬

殊に竈に來ることが多い、芭蕉の

蟹が家は小鰈老に交るいとゞ哉

と云ふ句は、**オカマコホロギ**の姿の鰈に似たことを巧みに言ひ現はし、

虫色々鳴く夜や宿にいとゞ飛ぶ

我宿や苔打被ぎ竈虫なく

竈馬なく上に据れりひき蛙

鳴きつるゝ壁の四隅のいとゞ哉

あら凄し竈馬の鬚の灯影

など皆此の虫の特色を謳つてゐる。**オカマコホロギ**は、晝間は大抵床下にゐるが、成るべく濕氣の多い處を好むやうだ、**エンノシタコホロギ**の稱は此處から出たものであらうか、『酉陽雜俎』には、

竈馬狀促織の如し、俗にいふ、竈に馬あれば食に足るの兆なりと。

とあるが、この事は『和漢三才圖會』にも出てゐる、支那の俗諺であらう。又同書には、

竈馬の鳴聲

按、竈雞似促織而小、色亦淡、身團而足長、秋夜鳴、聲似蚯蚓而細小、最寂寥、とあるが、所謂蚯蚓ミズズミとは、恐らくケラのことであらう、夜が更けて四邊の靜まり返つた時、本など讀んでゐると、臺所の方に細い、消えてゆくやうな、鳴く毎に足が細るか竈馬

と云ひ度いやうな聲で、きくくくくくと鳴くのが聞える、これは芭蕉が小海老と間違へたオカマコホロギである、『和漢三才圖會』の著者も言つた如く、事實、その鳴き聲は寂寥で、それを聞くと、lonelyなmelanchoryな、死んでゆく、のぢやないか、と云ふやうな感想が湧いて來る。少くともオカマコホロギは、メイテルリンク一派の神秘主義者で、その奉ずる所は『沈黙』であるらしい、聲のないのは始めから沈黙である、それに不思議はないのであるが、聲があるにも拘はらずそれを沈黙だと想はすのは、實に神秘ミステックである。オカマコホロギの鳴き聲は、聲あつて然かも沈黙の思ひあらしむる神秘の聲である。

自分は此の虫について、懐かしい追想がある。それは何歳の時であつたか、確とは記憶せぬが多分六つ許りであつたらう、舊式の釣ラムプの下で、自分

は姉様と一緒に遊んでゐたが姉様は『都の花』か何かを讀んでゐられた。室は五疊、臺所續きで、つい近くには井戸があり、彼方には洗場ながしがある。窓を洩れて淋しい秋の夜風が洩れる、二人の影は恐らく搖いでゐたであらう。疊の上を見ると、ひよっこり／＼と飛んでゐる者がある。姉さん、これは何と云ふ虫です？」と姉様に聞くと、

「それはオカマギイスてえ虫なの、可愛らしいでしやう。」と本を伏せて、姉様はぢつと見入られた。自分も瞳を据えて暫らくの間見詰めてゐた。これが自分のオカマコホロギと會合した第一の接見であつた。今に此の事を想ひ出すと、自分は淋しい感じが起る。秋の夜を獨り燈下で書物などを繙いてゐると、竈馬が悲しい、濕つぽい、涙を添へたやうな聲で鳴く。姉様を思ひ出す。――あゝ、最う姉さまは家うちには居らつしやらない、あの時のやうな幼い感じ、楽しい物語は、何度故郷へ歸つたとて、決して得られるものでない、あれは、あの時只だ一度限きりのものだ！ などゝ考へ、寂寞の感に堪へ得ずして、姉様の許へ手紙を出したことも度々あつた。

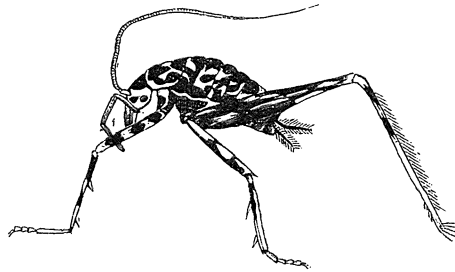
マダラカマ
ドウマ

クツワムシ

此の虫の一種にマダラカマドウマ(第十一圖)と云ふのがある。それは原名を *Diestramena marmorata*, D.H. と云ひ形は普通のオカマコホロギと違つた處

マダラカマドウマ

第十圖



ブルンナア氏原圖

好のよい、見榮のする虫ではない、その癖強い處があるかと云ふに、極めて傷^{いた}いけな、弱々しい觸^されば死ぬと云ふやうな、纖弱な性質の虫である。獨り人間のみに限らず、虫でも何でも面の醜いのは損である。

(四) クツワムシ

クツワムシ (*Neopoda elongata*, L.) は俗名をガチャ

ガチャと云ふ、虫屋では略してカチャと呼び慣らしてゐる。漢名を聒々兒と云ふが、これは清音で *Koakoaru* と發音し、その鳴き聲を採つて、寫聲的の名詞

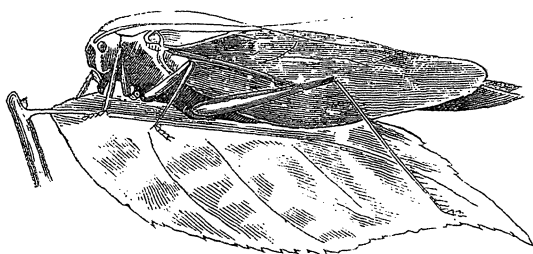
としたのである。日本でこれを轡虫と云ふのは、その聲が馬の轡に似てゐるからである。『俳諧歳時記 榮草』には『秋鳴く、聲馬の轡の音に似たり、因つて名づく。』と書いてある。又同じ支那でも滿洲ではこれを
ゴアデ 蠨々と云つてゐる、勿論鳴聲を直寫したものである。米國では Katydid と云ふが、矢張その聲を寫して

名としたものらしい。英國には此の虫がゐないらしく、字書には米國の虫と書いてある。

クツワムシの形(第十二圖)は、頗ぶるキリギリスに似てゐるが、形は更にそれよりも大きく、脚は甚だ長く、觸角は茶褐色に黒斑を呈し、腹部は黄色く、翅は深綠色を呈し、背部に於いて硬化し且つその色は淡黒褐を沫したやうに見える。肢も脚も本は青く、末は灰褐色を染め、脚には無數の小刺を具へ

その形状

第二十圖

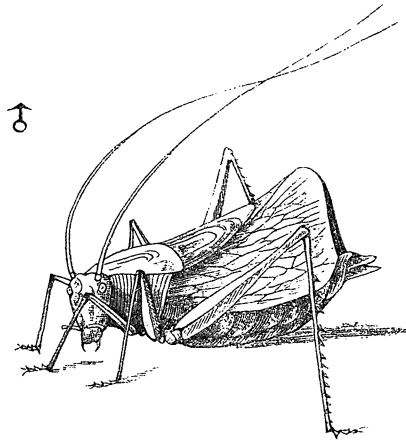


アメリカのクツワムシ

てゐる。例の『和漢三才圖會』には、

圖三十第

著者原圖



按。此虫莎雞之類。翅青腹黃色。前脚長疾走跳。每出入於穴。故多難獲。秋鳴聲似馬鑣音。因以名之。而本草不載之。唯羅山文集云。一虫號轡。大無我。誰知鞭策是蒲葦。恰似蒼蠅附驥來。但在口吻不在尾。

と記してある。これにも綠色と、褐色との二種あるが、何れも藪とか森とかの、青々と茂つた處に住んでゐて、がちや

くくくと喧ましく鳴き立てる。

殊に墓場などには多く住んでゐて、寂しい處を一入寂しくさせるのである。

滿洲種のゴアゴア(第十三圖)と云ふ

のは、日本種よりも少しく小さく、身長一寸五分許り、形はやゝ丸ツちい點が普通種と違ふ、翅も腹も綠色で、少許の黒き部分を有してゐる。その第一の特

質は前翅が短かくて、三角形をなし、上部が膨らんでゐる事である。日夜高粱

畑や、草むらにゐて、コア／＼／＼／＼と鳴いてゐる。土人はその鳴き聲を、形容してコア／＼／＼と鳴くと云つてゐるが、實際日本産のとは少しく違ふやうである。土人はこれを高粱稈の籠子ロンザに入れて飼つてゐるが、食餌としては南瓜の花、黄瓜ホウゴウの綿などを與へてゐる。小兒等は日本のと違ひ、此なものに對しては、餘り興味を感じないものと見え、炎天を叢間に入つて探し廻り、兩親に『とんぼ釣り今日は何處まで往つたやら。』と心配させるやうなのは見受けなかつた。米國の**ケイチツド**と云ふのは、日本のよりも少しく翅や觸角が長いやうである。『路傍の百姿』と云ふ書中に次のやうなことが記してあつた。

米人のクツ
ワムシ観

The katydid is frequent singer on the highway in the evening hours. He looks like a large green grasshopper, but he has larger wings, which are leaflike and delicately veined; his antennae are much longer than his body, and his slender, long legs give him a peculiarly distinguished appearance, quite superior to that of a plebeian grasshopper. The katydid lives among the tree and hides under the leaves in the daytime, but as soon as the sun sets emerges from

seclusion and begins his "petulant and shrill" tirade. Dr. Holmes calls him a "testy little dogmatist," and, as William Hamilton Gibson remarks, fall into an excusable entomological error by accusing the particular insect which he heard of being a *female* with a quivering, trilling voice! But in this case, the truth is, the male insects do all the disputing

而して更に之に二種あることを記し一は *Cyrtophyllus concavus* と云ひ、他は

Microcentrum retinervis と云ふ旨を書きつゝてゐるが、此の中後者が日本の

クツワムシ右前翅

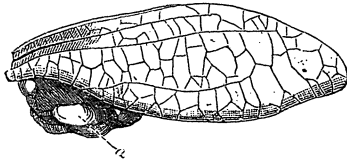
(a) 發音鏡

に類似してゐることを、その挿畫によつて知ることが出来るのである。

キリギリスの如くに、クツワムシも亦た、その右

前肢の基部近く、一個の透明な、硬堅な發音鏡(第十四圖)を持つてゐる、發音鏡は心臓形^{ハート}をなして少しく凹み、その面は微細なる無數の凸凹紋狀がある、發音鏡は常にクツワムシの背部に折れ曲り、左前

第 十 四 圖



圖原著者

翅を以て蔽はれてゐるが、啼く時には兩々相摩してコア／＼／＼ガチャ／＼と發聲するのである。試みに右前翅を挽ぎ取つて、その發音機關を摩擦して見ると、カワ／＼／＼と云ふ音を發する。クツワムシの鳴聲は、通常ガチャ／＼／＼と聞えるとのことだが、耳を澄まして聽いてゐると、カル／＼／＼と云ふやうに思はれ、『轡に似たり』との形容に、當つてゐない方でもないやうだ、『扶木集』中の、

駒とめて麓の人を尋ぬれば

をくらにすだくくつわ虫かな

と云ふ歌は馬と鞍と轡虫とを聯結した所が面白い。足彦といふ人の俳句に、行く水に音あり草に轡むし

といふのがある。水邊の月夜、草むらにすだくクツワムシの鳴き聲が想ひ浮べられて、いと面白い句である。

クツワムシに就いて面白く感へる事は、その名詞が音によつて統一せられてゐることだ。

Japanese..... {Gachagacha.
Kachakacha.
Chinese..... {Gongou.
Kwoakwoan.
American..... (Katydid.

何れにしてもK若しくはGの音がその名の始に付いてゐる、これは慥かにその鳴き聲から名を附けられた證據で、言語學上、ある動物の鳴聲を、寫聲的に名詞とせられること有り、と云ふ語原研究の原理を立證してゐる。

クツワムシの聲は、一言以てこれを評すれば、曰はく『噉、まい、い！』單にこれで盡きる譯である。亥かしその含んでゐる意義は何うか、少くとも人間が聽取上、頭髓におこる感想の性質は如何、自分は思ふクツワムシの聲は、たしかにコホロギ、キリギリスなどよりも、男らしく、勇ましく、活動的で、悲しい分子に缺けてゐると。無論その音の性質上、スズムシ、マツムシ、ハタオリなどの方が優つてゐるから日本の詩人は多く此れを歌はず、彼等に就いたのであら

泣蟲文學と
の不和

うが、他面に於いて此の虫の聲の勇壯で、活潑なことも慥かに、泣蟲文學者に捨てられた一原因であらう。

たそがれや月ほの白き新墓に

寂寞破りてくつわ虫鳴く

顫ふ手に胸を壓へて夜もすがら

くつわ虫聞く夢うつゝかな

聲の寂しみ

然もクツワムシの聲には、一種の寂し味がある。都は塵の國。蒸し暑き軒端の竹籠に鳴くクツワムシを、仇なる騒ぎする虫よと呼ぶ都人士は、黄昏に、が月に映るおぼろの吾が影を踏んで、沈黙みちわたれる田舎の木藪竹藪の薄ちや／＼と鳴くクツワムシの音を聞け、そこには無限の『寂寞』と、『沈靜』との影がたゆたうて居るであらう。

がちや／＼、がちや／＼、

何見て鳴あく、

十五夜お月さん、

見て鳴あく。

何と趣のある童謡ではない乎！『皎夜光』とうたはれた十五夜の月が、圓く圓く天心に懸つてゐる時、子供が此の歌を歌ひつゝ野面の細道を辿つて、轡虫の鳴く方へ行く様を見ると、自分も亦た頑是なき幼童時代に歸つたやうな氣がする。あゝ自分も七八歳の時には、姉様に伴れられて、町外れの墓原や、竹藪やへ、**クツワムシ**取りに出懸けた事があつた、あの時分はたゞ最う愉快な許りで、憂といふ事を知らなかつたなどと、思ひ出しては茫洋と机に靠れて、爲すともなく秋の一夜を過ごすとも度々である。

Katydid, katydid! what do you see that makes you sing?

"Seeing the Lady Moon of the fifteen night,

I sing—Gachai gachai?"

(五) クビキリバツタ

クビキリバツタ(*Conocephalus Thunbergi*, Stoll.)と云ふのは、名の上から見ると

クビキリバ
ツタ

その咬嚼力

イナムシ科に屬してゐるやうに思はれるが、事實はキリギリス科に屬してゐるのである。その頭は圓錐形をして、キリギリスなどよりも更に細長い。色は概して綠色であるが、ともすると淡褐色なのもある。麥畑などに棲んでゐて、日盛りを喧ましく鳴いてゐる。クビキリバツタの咀嚼力は非常に強い、その口で衣の袖か何かを咬^{くは}へさして置き、急に袖を引くと、つるりと首が抜けて了ふ。それ故クビキリバツタと云ふのであらうか、兎に角滑稽趣味に富んだ虫で、小兒は屢々捕へてその首を抜き、『やあ面白^{おもしろ}いなあ！首が抜けちやツた！』などと云つてゐる、迷惑なのはクビキリバツタ、敵を防ぐ積りで強く噛みついたのが最期、わが命を奪^もれる因^{もと}に成るのである。

(六) ウマオヒムシ

ウマオヒ

ウマオヒムシ(*Locusta plantaris*, D. H.) (第十五圖)は俗にスイトと呼ばれてゐる。大阪地方ではズイツチヨと云ひ、三重地方ではチヨンズイ、秋田地方ではハタオリと云ふ、何れも鳴き聲をその儘名前としたものである。『俳諧歳時記

『榮草』には、

江東の俗**スイト**といふ、その聲**スウイ**といふが如し、**イナゴ**に似て小なり、色青し、尻に劍あり、又なきものあり、雌雄の異なるなり。中元の時

夜盛んに鳴く、その響き紡車を捲くがごとし、關東の俗言に馬追と云ふ。

その鳴聲

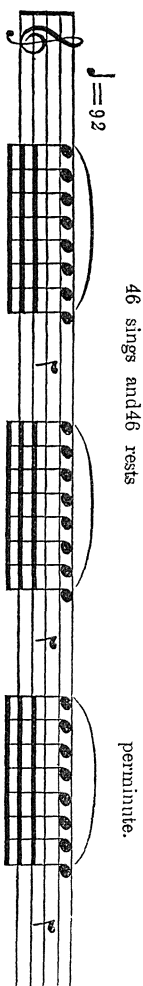
第十五圖



ウマオヒ虫

が、その鳴き聲はトリイトリイと云ふ相だから、恐らく**ウマオヒムシ**と同種

と書いてある。その鳴き聲は實際トンスイ、／＼と云ふやうに聞える。英國に『Tree-cricket』と云ふ虫があるが、圖解によれば、形はわが國の**オヒメトンボ**と、**ウマオヒ**とを雜兒あひのこにしたやうなものだ



無論その音聲は單調で、幾度も同一調子を繰り返すのであるが、その多少の顫を帶んだ、玄かも細い清らかな聲は、耳の穴から腸の底にまで沁み渡るやうに思はれる。**ウマオヒムシ**は晝は畠や、木の間などにゐるが、夜は火を慕うて人家の中に入り来るのを常としてゐる。庭から椽先、簾窓、鴨居、障子といふ風に、次第に燈光に近づき來り、遂には洋燈にとまるのであるが、洋燈では始まらぬ、昔流の行燈か、雪洞ほんほりなら洒落れてゐる。洋燈ランプの傘と**ウマオヒムシ**！虫は昔の虫ながら、燈は變つてゐる、その間に調和の成り立たないのは當然である。

秋夜の椽先

夏の終り秋の始めであつた。雨は晴れて風が涼しく、裏庭の方から吹いて來る、古めかしい行燈の下で、お母様は縫物せられ、姉様は本を讀んでゐられたが、まだ小兒であつた自分は、紙片への、への、へも、へしか何かを書いてゐた。

俳句に現は
れしウマオ
ヒ

するとウマオヒムシの聲が椽先の簾の邊りで聞え始めたが、暫らくして室内に入り、鳴居の隅にとまつて鳴いてゐる。

「姉さん、**チョンズイ**が來たから、捕つて下さいな！」と姉様に云ふと

「あゝ、捕つて上げますから、少しお待ちなさい。」姉様は行燈の側へ飛んで來たら、一捉みに捉まうと思つてゐらしたらしい。やがて**ウマオヒ**は鳴きを止めて、翅音まづかに行燈の側に止つた。姉様はその白い、纖ほそい手を伸べてそれをお捉りなさつたことがあつた。こんな記憶はなか／＼失はさらないもので、今でもそれを思ひ出すと、わが經驗ながら、わが頭腦は牽引チヤムされて繪でも見てゐるやうな氣がするのである。

書院にも機をたてけり虫の聲

機織りや窓にも蜘蛛の糸仕事

はたをりの鳴き細めたる柱かな

促織がなくなれば夜長を何とせん

の如きは、みな**ウマオヒムシ**を歌つたものに相違ない。また『金葉集』の中に載

せてある、

さゝがにの糸ひきかくる草村に

はた織むしの聲聞こゆなり

と云ふ歌も、恐らくウマオヒムシの事を歌つたのであらう。曩にも云つた如く、此の虫の事を東北ではハタオリとも云ふから、ハタオリと書いてある故に、ウマオヒでないとは云はれないのである。

秋燈可親
秋の夜は長い。學生諸氏に取つては、所謂『秋燈可親』の候であるから、みな机に向つて、思ひ／＼の書物を讀まれるだらうが、この時黄葉の蔭、簾、障子などに止つてウマオヒムシが鳴き出すこともあらう。そう云ふ場合には傷けぬやう一疋を捕へて、翅、肢、腹、頭などを調査、研究して見るのも面白からうと思ふ。

(七) ヤブキリ

ヤブキリ

ヤブキリ (*Locusta japonica*, Brun.) は、その形頗ぶるキリギリスに似てゐる、あ

る地方ではこれを青^{アヲ}ギイスと云つてゐるが、支那では三叫驪^{Sanjion}と呼ぶ。今まヤフキリを捕へ來つて、これをキリギリスに比べて見ると此^{こゝ}の脚には長い刺が生えてゐるし、口は鋭くて咀嚼力強く、他の虫を食うて生活してゐる點などが違ふ。殊にキリギリスは草葉の間に住むのを常としてゐるが、ヤフキリは樹上にも棲息し、高い聲を立て、喧ましく鳴き立てる。此の虫の翅色は、矢張緑であるけれども、何處となく沈んだ黒味を帶んでゐて、透明の度合が少ないやうに思はれる。キリギリスは人に咬みつく様なことをしないけれども、ヤフキリは捕へられると、小兒の手に咬みつく事宛がらトンボの如くであるから、小供はこれを厭つてゐる。

(八) ツユムシとヒゲナガササキリ

ツユムシ

ツユムシ(*Phaneroptera nigroantennata*, Brun.)はキリギリス科の中でも、體の細

長い方で、後翅も長く伸び、觸角の腹部は、兩側とも黒褐色を呈してゐるが、自分はまだ此の虫については研究して見ないから、詳しいことは知らない。

ヒゲナガサ
サキリ

* * * * *

ヒゲナガササキリ (*Xiphidium Longicorne*, Redt.) は、他と違つて全體黃色を帶び、頭は**クビキリバツタ**の如く、圓錐形をなしてゐる、觸角は頗ぶる長くして、全身長を超え、前胸背の兩側翅の半分以上は黑色を呈し、跗節もまた黒い、これも矢張り翅を摩擦して鳴くさうだが、その聲はまだ聞いた事がない、實は省くべきだが、參考までに書いたのである。

(九) **イブキギス**

イブキギス

イブキギス (*Deecticus japonicus*, Boliv.) と云ふのは、殆んど**キリギリス**と均しく、形が少し小さい丈である。けれども全體黒褐色を呈し、綠色のものほど美しくくない、一寸と見ると**アフラ**(褐色の蝨蜥)のやうであるが、よく見ると體も小さく、色も黒い、形も少しは違つてゐる。**イブキギス**は北海道に澤山ゐる相であるが、自分の満洲で見たのは、たしかに北海道のものと同種類らしく、鳴き聲は稍促短にして、内地のものゝやうに美しくくない。英國の**ミイドウ、グ**

緑色と黒褐
色

ラツスホツバアと云ふのは、その形、わがイフキギスに似てゐるらしい、形を離れ、聲を離れて、單に色の上から見ても、『希望多き綠色』と『死を聯想せしめる様な黒褐色』とを比ぶれば、後者よりも前者の方が牽引的アトラクティブなことが分る。かの小兒がイフキギスを厭ひ、キリギリスを好むのは、此の原因があるからではあるまい乎。均しく褐色を帶べるものでも、アフラは色淡く、綠色の縞條を有し、且つ聲が美しいから小兒に愛せられるので、イフキギスとは日を同じくして語ることが出来ない。

第四章 蟋蟀科

(一) 總説

コホロギ科

蟋蟀科(Cryllidae)は、大體に於いてキリギリス科とよく似寄つてゐる。此の

科に屬するものは、その觸角鞭狀にして概ね身長よりも長く、單眼を有し、尾端に二個の尾狀突起があつて、細毛を有してゐる。跗節は三個あり、前脛節に聽器を持つてゐるが、口の咀嚼力は螽斯科ほど強くはない、けれどもエンマ

コホロギの如きは随分強き咬嚙力を有して、籠に入れて置くと、食ひ破つて逃げ出すことがある。

食餌は概ね草である。小形のものには皆な食草性で、好んで瓜を食べるけれども、大形のものには時として食肉性のものもある。**スズムシ**などは砂糖が好きで、人に飼養せられてゐるものは、屢々黒い玉砂糖を以て養はれる。

コホロギ科に屬する昆虫は、大抵みな日光を忌み嫌つて、地中深く孔を掘り、或は塀牆の中、石木の下などに潜んで鳴く。それ故その彩色は黒褐色のものが多く、これは「自然淘汰」の結果たる保護色で、自分の體色を土石に均しくし、自己よりも優つた鳥類などの害を免れる爲めに、その目を眩まさうとするもので、恰度常に樹の間や、草叢にゐる**キリギリス**科のものに、綠色を帶んだものが多いのと同じ理窟である。

コホロギ科のものは、早秋に産卵するのであるが、華尾が終ると雌は雄を食ひ殺して了ふとは、一般世人の云ふ所である。産下せられた卵子は、木の葉がうら枯れて、ぼつくと風に散り始める晩秋になると孵化して幼虫とな

食餌

その特性

發育の經過

るのであるが、その儘變形せずに越年して、後立派な蛹となり、成虫となつて、來ん秋を己が時と羽うち打つて喧ましく鳴くのである。

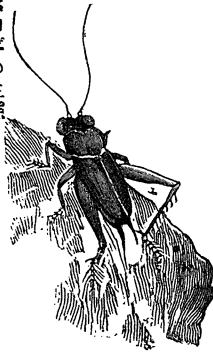
(一) コホロギ

コホロギは鳴く虫の中で最も普通な種類で、秋の始めに成ると何處の草原にも居る。この虫はコホロギ科の代表的昆虫であるから、これの事さへ悉しく説いて置けば他は推して知ることが出来る。

コホロギは原語を *G. berthellus*, Saus. と云ひ、漢名を蟋蟀と云ふ。蟋蟀は清語

マシウス氏原圖

第十六圖



コホロギの生態

コホロギを指したもので、エンマコホロギ、クサヒバリなどとはその形を異である。英語の *Brown cricket* と云ふのは、普通の

その形状

にしてゐるのだが、彼方でも此の虫は最も普通のものらしく、わが國の小兒のやうに、彼方の小兒も此の虫を愛してゐる相だ。

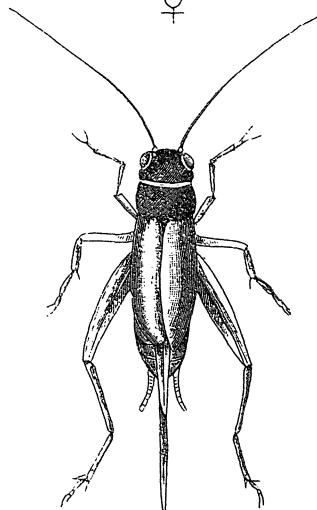
コホロギの形状(第十六、十七圖)は、螻蛄けりらに似て小さく、翅長く、觸角長く、全身

コホロギ

第七十圖

♀

著者原圖



少し黒色を帶んだ黒褐色を呈してゐる、腹部は相當に大きくて肥え、薄茶色をなし、前翅は背部に重なり合つて、一枚のやうに見える下から、紋狀の少ない後翅が、刺狀をなして長く伸び、宛がら尾狀を呈してゐる。その單眼を有し、二個の尾狀突起を尾端に有し、三個の

跗節を有することは、一般の**コホロギ**科のものと均しい。曲亭馬琴の『俳諧歳事記』には、

本草四十一卷竈馬の附録にのす、一名蟋蟀又蜚と云ふ、立秋の後夜鳴く、

異同辨

イナゴに似て黒し、翅あり、角あり、頭は切れたる如く尖りなし、俗につゝりさせとなくと云ふ、西土の方言クロツツと云ふ、古歌にきりぐすともめるは是なり、秋の末まで鳴く、故に古歌に霜夜によめり。

とある。兎に角今の所謂キリギリスは、昔のキリギリスと違つてゐることは、『萬葉集』『古今集』などの歌の意味で分る、あの『小倉百人一首』の中にある

きりぐす鳴くや霜夜の小蓆に

衣かたしきひとりかも寝ん

と云ふ歌を見ても、今のキリギリスが、昔のキリギリスと違ふことは分る。昔のキリギリスは確かにコホロギを指してゐたのだ、キリギリス蝻嘶が夜鳴くことは少ない、これに反してコホロギは夜鳴くことが多い、また『和漢三才圖會』には、

似蝗而小。正黒而有光澤如漆。有翅及角。善跳。以夏生。至秋後夜鳴。好吟於土石磚壁之下。尤好鬪。勝輒矜鳴。其聲如急織。故謂促織。亦曰趨織。

とある、前半は毫も間違つてゐないやうだが、後半には疑がある。コホロギの聲を形容して急、織、る、が、如、しとは受取れぬ、これは恐らく馬追か、キリギリ

又かの間違であらう。わが國でも、東北地方では馬追のことをハタオリと云ふから、漢詩に

明月皎夜光。促織鳴東壁。

ハタオリに
問つての疑

とあつたとても、何等の撞着がない。人によるとハタオリと云ふのは、キリギリスのことだと決めてゐるから、**キリギリ**スは夜は鳴かないから、明月の下で、促織が鳴いてゐるとは少しく釣り合はぬ、と云ふかも知れないが、それは間違つた話だ。それよりも前に先づ、日本の古く『ハタオリ』と云つたのは、今の何であるかを研めなければならぬ、『促織』の字を和譯して、直ぐハタオリと訓み、蟋蟀がハタオリだと云つては間違が起り易い、殊に昔の人は科學的知識に缺けてゐたから、諸書みな勝手な事を言つてゐて、その間に少しも統一のないのを見ても分る。要するに此な詮索は愚な話であるから、大抵にして置く方が可い。古人の説の無茶苦茶なることは、朱子註に、

斯螽、莎雞、蟋蟀、一物、隨時變化、而異其名。

と書いてあるのを見ても分る。此な風に知識の幼稚な時代に書かれた事は、

朱子註の亂

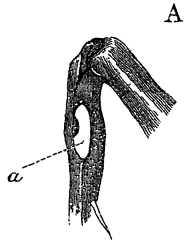
餘り當になつたものでない。

少し元へ戻つて云ふが、コホロギのまん丸ちい頭は、黒光りにびか／＼と光つて頗る澤が可く、全で漆塗のやうに見える。眼のあたりは、稍々醜いけれども體軀が小さいのに、頭が丸ツちいので、何處やら可憐に思はれる。殊にその翅と來たら、雄のは渦卷があつて美しく、雌のば格子形の紋があつて美しい。鳴く時はそれを持ち上げるのだが、他處から見ると、掲げられた翅が軀と直角になつて、十字形に見えるのである。

觸角(第十八圖)は柔かく、長く、徐かに／＼絶えず動かされてゐる、その色は黒褐で、縞條を有し、鞭狀をなしてゐる。聽器(第十八圖)は前肢に附いてゐるが、

著者原圖

第十八圖



(A) 前肢

(B) 觸角

(a) 聽器

B

脚の根基が、少し赤味を帶んだ鼈甲色をして、透きとほつてゐる所は頗る

その色白く、頗る小さいけれども、黒い所へ白いものが附いてゐるのだから、肉眼でもよく見える。また

その鳴聲

美しく、何かの裝飾にでも成り相に思はれる。

コホロギの鳴き聲は、人の耳に何と聞えるか、或はコロ／＼ジイと聞え、或はホロ／＼ホロと聞え、或はヒヨ／＼／＼と聞えたと云ひ、多少の差異はあるけれども、略ぼ似寄つてゐる。家持の歌に、

きり／＼すつ／＼いりさせとは鳴くなれど

むらきもぬたる吾れは聞き入れず

満洲の月夜

と云ふのがある。これは**コホロギ**の鳴きをを『つゞりさせ』と聞いたのであらう。自分が曾て満洲にゐた時、九月も末つ方の月明らかなる夜をさる山の麓に彷徨つて、草葉にすだく**コホロギ**の聲を聞いたことがある。夜露はまゝとまゝととわが衣を濕ほして、游子の心は悲哀の淵に投げ入れられた。わが老父母は何うしてゐられるだらう。わが幼弟は何うしてゐるだらう？ 自分が今病んで、異郷の秋の夜をそゝる歩きして、鳴く虫の聲に腹を絞るやうな思をしてゐるとは知らないで、矢張り此の月影を見てゐるだらうなど思ふと、虫の聲は一入寂しく哀れに感じられる。昆虫學者は虫の鳴く目的を推量して、偶

コホロギの
鳴聲の直寫

を求めるのだと云ふが、自分はその時、コホロギは月に浮かれて穴から彷徨ひ出で、衰へゆく自己の運命の果敢なきを謳つてゐるのだと思つた。するとその鳴聲は、コロコロジイとも聞えず、ツヅリサセとも聞えず、

よろ／＼と、われ踰^よる／＼、

ほろ／＼と、涙こぼる、

そろ／＼と、衰ふる、

日々に、聲はそる、

する遂に、死んでゆく。

とやうに聞き取られる。あゝ、コホロギの聲の表彰する所は『壊滅』である、そのシンボルは『死亡』である。“Destroy” “Death” 何と哀れの深い、物寂しい象徴ぢやないか！

死亡と壊滅

コホロギの聲は、重もに夜に於いて聞かれるのであるが、晝でも曇つた日や、静かな時には聞かれなことはない。けれどもその最もよく調和した時は、青白く月の照りはえる時である。月の光が死人の顔のやうに、青く／＼下

悲しき音色

マシウス氏の
コホロギの
觀

界を照らして、地球の上に沈黙と寂莫との充つる時、露はぼたりと草葉に落ち、**コホロギ**は悲しげに磚石の下に鳴く。樂觀せよと云はれても、その『日々に聲はそる——末遂に死んでゆく。』と云ふ聲を、自分は楽しいと思ふことは出来ない。顫を帶んだ、然も鋭い所のあるその聲は、今將さに身投げをしようとして、巖頭に立つた美婦の最後の祈禱の言葉に似てゐる。**マシウス**氏は、その著“Familiar features of the roadside.”の中で、**コホロギ**の鳴聲について記し、

His sharp musical note also thrills interruptedly from sunset to sunrise along with the softer and more regular note of the white cricket. In June and July the meadows and wooded pastures are filled with the cricket's music. His chirp is fitful and shrill; it is not really a trill, but the rapid repetition of a single note from three to five times with irregular intervals.

と云つてゐる。げに**コホロギ**の聲は、これを**キリギリス**に比べると、少しく複雑で、一層高い音樂的價值を持つてゐると云ふ事が出来る。

併し**コホロギ**が間斷もなく鳴くのを聞くと、さもなく熱心なやうに思は

キイツの詩

れたり、または忙がしさうにも思はれたりする。キイツの詩の中に此う云ふ文句がある。

The poetry of earth is ceasing never :

On a lone winter evening, when the frost

Has wrought a silence, from the stove there shrills

The Cricket's song, in warmth increasing ever,

And seems to one in drowsiness half lost.

こんな考も全く起らぬではない、何となく眠げに、而して熱心なやうにも聞えるが、自分は寧ろ悲しいと聞き取られるやうに思ふ、併しそれも遺傳の勢力で、古人が皆コホロギの音は悲しいものゝやうに云つたのを、暗黙の中に頭髓中に叩き込んだ故かも知れないが、聲音は畢竟、聴取の際の感情と一致を保つことが多いから、彼あだとか此うだとか云ふのは愚かも知れないのである。

自分は思ふ、ひとりコホロギのみならず、一切の虫聲は、之を聴く人の心持

聴者の心持

聯想との關係

如何境遇如何によつて、或は哀れに聞こえ、或は娛しげに聞えるのである、虫聲それ自身の性質は際立つた悲哀性も持たねば、また歡樂性も持つてゐないのだと。玄て見ると虫聲の有する意味を解釋する第一の要素は聯想(Association)だと云ふことが出来る。

ひとり寢の友にはならで蜚

なく音をきけば物思ひそふ

獨り寢の寢ざめの床の小蓆に

涙もよほすきりくすかな

物思ふ寢覺とぶらふ蜚

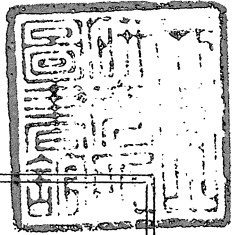
人よりもげにつゆけかるらん

壁に生ふる小草にわぶる蜚

玄ぐるゝ庭の露いとふらん

秋萩も色づきぬればきりくす

わが寢ぬごとや夜はかなしき



氣候との關係

詩經

など幾何例を擧げて來ても、皆悲しみの側を謳つたもの許りである。由來日本の文學は、泣、味、憎、文學で、『涙』がその最も重要な元素エレメントだから、虫聲に對する感想も自ら涙つぽくなつてゐることは言はずとも明らかである。

今一つ、コホロギの鳴く時が、聽者の感動に與ふる刺撃も注意すべきである。コホロギの鳴くのは概して夜である、玄かも秋の末で、もう直きに冬が來ると云ふ時だから、雰圍氣は透明に、溫度はずつと下つて、肌身がうす寒く感ぜらるゝ程である。その時、敗壁の下、枯れ草の中にコロ／＼ジイと鳴くのを聞くのだから、何となく物哀れに、寂しく感ぜられるのもあらう。

蟋蟀在堂。歲聿其莫。今我不樂。日月其除。

無已大康。職思其居。好樂無荒。良士瞿々。

蟋蟀在堂。歲肄其逝。今我不樂。日月其邁。

無已大康。職思其外。好樂無荒。良士蹶々。

蟋蟀在堂。役車其外。今我不樂。日月其慆。

無已大康。職思其憂。好樂無荒。良士休休。

と『詩經』にある如く、その鳴く時は秋の末つ方で、もう年の暮も近づいたと思はれる頃であるから、周代のやうな太古にあつては、何となく騒々しい感じも起り、覺えず外にある征夫の事などを偲んだのであらう。

俳句

寒き夜や敷居をくゝる蜚(曉台)

我が宿や夜明けても鳴く蟋蟀(一草)

草の下も月夜なりけりきりぐす(岳輅)

舟の酔さめたる夜半や蟋蟀(保吉)

などは皆な、夜の**コホロギ**を謳つたものである。その他支那の古詩に現はれたる**コホロギ**も亦大抵は、夜鳴いてゐるやうである。

漢詩

歲暮涼風發、高天肅明々。招搖西北指、天漢東南傾。朗月照閑房、蟋蟀吟戶庭。と云ふ陸機の句を見ても、

四時更變化。歲暮一何速。晨風懷苦心、蟋蟀傷局促。

と云ふ『古詩』の句を見ても、**コホロギ**が歲暮とか靜夜とか云ふものに、深い關係を持つてゐることが分るのである。

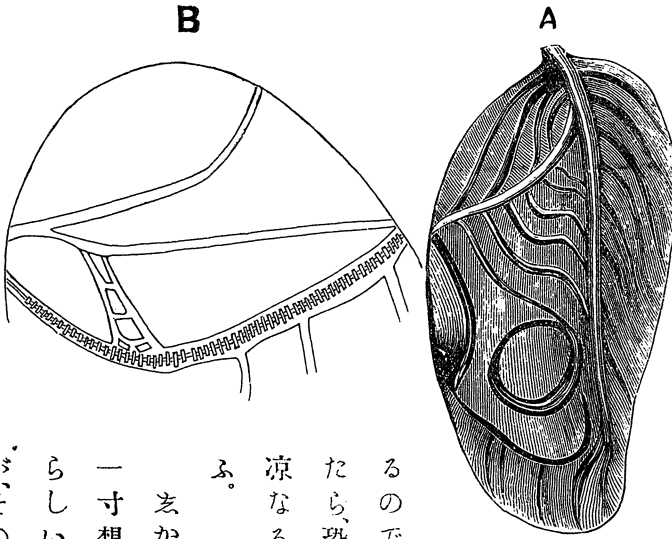
その性質

發聲機關

圖 九 十 第

(A) コホロギ右前翅
(B) コホロギ發音器

著者原圖



然らば若し抽象的に**コホロ**

ギの鳴き聲の性質はカオワリテイ何うかと

問はれたら、自分は鋭い、と答へ

やうと思ふ、そのSharpな、**ま**かも

softで、Regularな鳴聲は、屢々繰

り返されて一種の調子トーンを形造

るのであるが、自分は若し作曲家であつ

たら、恐らく此の聲を直寫して、秋野の荒

涼なる月夜の景を謳つたであらうと思

ふ。

まかも此の美しい聲は何から出るか、

一寸想像して見ると、小娘のやうな可愛

らしい口からでも出るやうに思はれる

が、その實、第十九圖Aのやうな黒褐色の、

透明な、スキヤの羽織然たる翅を摩擦して起るのである。これは右前翅の圖であるが、平生は此の下へ左前翅が重なつて、背部を掩うてゐる。玄て鳴く時は双翅共高く持ち上げて、渦卷のやうな紋、卽ち凹凸ある翅面を摩擦して鳴くのであるが、尙ほ仔細に觀察すると、第十九圖Bのやうに複雑な發音機關がその翅の基部に具へられて居る相だ。

求偶

前にも云つた通り、その鳴くのは無論雄虫であつて、雌は決して鳴かない、鳴く目的は勿論求偶で、悲喜の情を謳ふと云ふやうなことはないらしい。その證據には一つの籠へ、雌雄を一所に入れて置くと、餘り鳴かないけれども、雄だけを別の籠へ入れて置くと、鳴き方が烈しくて、殆んど狂したのぢやあるまいかと思はれる。あゝ戀こそはげに曲者！人は勿論、虫までもその Sweetest Flavour に酔うて力のある限り聲を振り立てるとは、如何に美くしい戀の香り！戀の味！

(三) エンマコホロギ

エンマコホ
ロギ

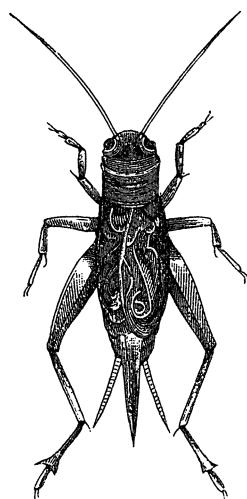
美しくいお
怪

鬼百合とエ
ンマコホ
ロギ

エンマコホロギ(第二十圖)は、油胡蘆(*Gryllodes chinensis*, Web.)の事で、普通のコホロギと大差はない。その頭は少々大きく、且つ堅く、びか／＼と黒光りをしているのに、黒眼の周圍が少しく灰白色を呈してゐるので、目白の眼のやうに、何處やら可愛らしくも思はれるが、顔全體から見ると、何うも餘り可憐ではない。——口の悪い人が見たら、或は『此の美しいお怪!』(“This beautiful monster”)と云ふかも知れない。憊うなればエンマコホロギもミラボウと同格で、豪傑の仲間入が出来ゐる譯だが、和名のエンマと云ふのでさへ、恐ろしい地獄の閻魔大王の子分らしい氣がして、まだ形を知らない人でも、恐ろしい顔した蟲だと思ふに違ひない。年の若いハイカラ詩人は、唇を動かせば必らず、星堇、百合といふが、その百合の中に、鬼百合といふのがあつて、名を聞いて花を想像すると、ぎざ／＼でも澤山あつて、牙や角のやうに見えるとも思はれるが、その實美くしい花なのである。それと一つ事で、エンマコホロギだとしても、別に捕つて食ひ相な顔はして居ないのである。名前と人相とは全く一致しないもので、鬼神のお松などは、毒婦ではあつたが、なか／＼の容顔好きりやうよしであつ

エンマコホロギ

第十二圖



た相だ、何しろ名前の悪いものは一割損だ。油胡蘆なども、『ヒメコホロギ』と云ふやうな名前であつたら、人に最と褒められたかも知れない。

エンマコホロギの鳴き聲は、普通のコホロギと異つた處がないけれども、聲が少しく太くて、振顫(すず)の度合が多からぬ

著者原圖

やうに思はれる。で、餘韻も他のに比べて少ないが、尙ほ淋しい、哀れな、人の肺腑を刺るが如き音色をしてゐる。曾て河内の四條畷に、舊友の池木鶯溪君を訪うて、その畑中の一つ家に泊つた時、夜半の寐覺に、椽端の方で、ほろ／＼と鳴く、淋しい蟲の聲が聞える。あゝ寂しい聲だ、と獨語つて、自分は心寂しさに堪へず、熟く眠つてゐる池木君を呼び起して、

その鳴聲

懐旅の夜の追

「おい君、あれは何の聲だ。エンマコホロギと云ふ奴ぢやないか。」

「うむ爾うだ。」友は眼を醒まして、あれは弟が飼つてゐるんだ。僕は餘まり好かぬが、弟は非常な蟲好で、毎晩、ススムシや、マツムシや、コホロギやの瓶を、置き更へて喜んでるんだ。」

「爾うか、それは面白い。」

「何が面白いものか、僕等は八釜敷くて困つてゐる、昨宵などは僕お終夜眠られなかつたよ。」などと友はぶつ／＼呟いてゐたが、やがて眠に落ちて了つた。——自分はその時、失意落魄の身の、種々な事を考へ續けて、夜明方まで、まんじりと眼も閉ぢなかつたが、不思議な事には、その夜の自分の考は、蟲の鳴聲と調和して、一種の調子があるやうに思つた。感情の「トーン」一高一底、思想の一波一瀾が、恰度、ほろ／＼、ほろ／＼と云ふ蟲の音の調子に合つて、上つたり下つたりしてゐた。で若し自分に新造語を許さば、自分は此の夜の考を、*Rhythmical thought*とでも云はうか。——其時自分は心に思つた、音楽とは、畢竟人心の響である、人心が外に發現して聲の姿をなすもの、これ即ちち音楽で

ある。故に巧みなる音樂家の作つた譜曲は常に必らず、見えざる人心の琴絃と同一なる調子トを持つてゐるとすると、自分の胸中には感情の人間を音樂にせんとしたワグネルや、思想の人間を音樂にせんとしたストラウスや、これ等名だゝる樂師の心持も分つたやうな氣がして、覺えず小蟲エンマコホロギに謝した事であつた。

(四) クサヒバリとカンタン

クサヒバリ

クサヒバリ(*Cyrtoxiphus risemae* Saus.)は、コホロギ科の中で、身體からだの最も小さいものであるが、その形は頗ぶる蟋蟀コホロギに似てゐる。英語の“the tiny spotted cricket”と云ふのは此れであらう。全體黒褐色を呈し、脚には黒紋を具へてゐる。

クサヒバリ(第二十一圖)は、夏の終りから、秋の始めへかけて、野に澤山ゐる。鳴き聲はコホロギ科の中でも美しい方で、鋭く、且つ震へを帶んでゐる。その聲調ソトはリイ、リイ、リイと云つて、聲と聲との間には二秒若しくは三秒位の休止レストがある。人若し靜かな秋の夕暮に、草原にゐんで耳を敬てたならば、クサ

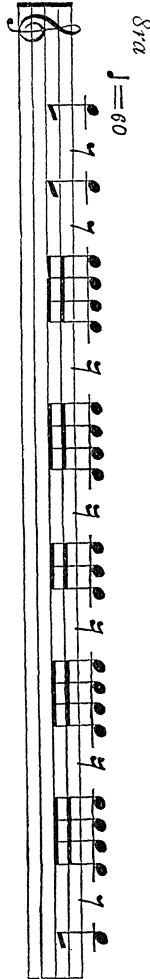
マシウス氏原圖

第十二圖



クサヒバリ

ヒバリの聲が幽微に草葉の間から洩れるのを聞くであらう。胸に憂を抱いてその聲でも聞かうものなら、闇を辿つて冥府の國へ行くやうな氣がする。假ひ、心強い、快活した氣分のものでも、顫を帶んだ此の調べを耳にしては、悲哀の感に打たれずには居られまい。——實にクサヒバリの聲は、冥府の音楽である。



クサヒバリも亦、鳴く時には、マツムシや、スズムシや、他のコホロギやの如くに、身と直角を保つ程に、その翅を上部へ揚げて、打ち振り打ち振りして鳴くのである。此の昆蟲は形が小さいので、何となく可愛らしく、一寸と見ても『食べて了ひたいわ!』或愛らしき小娘の言葉といふやうな感じが起るのに、搗てゝ加へて聲が鋭くて、微かな震顫をさへ帶んでゐるので、可愛らしい上

小蟲の王

にも、何となく心細い、哀れな感情が起る。

實際、此の蟲ほど、美しく、可愛らしい蟲は少ない、ミツカドコホロギも随分小さい方であるが、これは、それにも益して小さく、現にわが眼の前を這つて居ても、それとは分らぬ程、無論近眼の人の目には入らない。蟲に興味を持つてゐる讀者諸君は、恐らく知つてゐるであらうが、最う秋も半ばと云ふ時、郊外に出て草葉を踏み分けたならば、數多の小音樂者がそれ〴〵得意の聲を振り絞つて、唧々と鳴いてゐるのを聞くであらう、その中にもクサヒバリの低い〴〵亡者もうぎのやうな調曲しらべは、明らかに卿等の耳にそれと響くであらう。その時、手で草葉を掻き分けたならば、恐らく小音樂者は、その物狂はしい熱心な節奏しらべを止めやう。そして尙も草葉の上を見守つてゐるならば、小さい、黒い點スポットのやうな物が、わし〴〵と葉々の上に這ひあがるのを見るであらう。それこそは即ち、小蟲の王たるクサヒバリである。吁々、此の弱い、小さい、いたけな蟲を強い、大きな人間が見て、誰が、愛憐アピイ (Pity) の念を起さぬものがある。クサヒバリは實に可愛い蟲の王である。可愛さ餘つて憎さが百倍する

愛憐

小音樂師

ラフカデ
オ、ヘルン氏
の「草雲雀」

ものなら、小賢^{こが}しげなるその音楽を聞く讀者諸君は、恐らく小憎らしいと云ふ感じを起して、小娘と共に食べて了はうと思ふとであらう。

マツシウス氏の如きも、此の蟲のことを小音樂者と呼び、その鳴き聲を説明して “This musician has a variable song made up of a trill and a sharp preparatory click, ………と書いてゐる。自分はこれを見て、最とも巧みに、その聲の性質を説明し得たと思ふ。先年物故せられた小泉八雲(ラフカデオ、ヘルン氏)は、わが國の Singing insects のことを書かれたが、その中に『草雲雀』の一節がある。

籠の高さは丁度二寸に幅が一寸五分、戸は開きになつて、入口は漸く小指の尖端が這入る位である。けれども歩いたり跳^とんだりするのに少しも不自由はない、何故かといへば、此の蟲は餘程注意して周圍の青銅の網目から覗き込まないと見付からぬ程小さい。自分は蟲が何處に居るかと思つて、明るい所で度々籠を廻して見る。すると毎時も天井の金網の隅に、上向になつて休むで居た。

體よりも非常に長い、そして明りにかざさなければ見分のつかぬ程細

い一對の觸角を持つた、普通の蚊位な蟋蟀こはらぎと想へば可からう。草雲雀といふのが其名で、一疋の價は丁度十二錢、體重たいじゆうと等しき黃金よりも貴いのである。こんな蚊かのやうなものが十二錢とは！晝の間は新しい茄子か胡瓜を食する時の外は睡つてゐるか考へ込むでゐる。その餌は毎朝入れてやらなければならぬので、小奇麗によく飼はうとすれば一寸煩はしい、蟲を見たならば誰しもこんな鳥澁しづの小さいものの爲に少しでも苦くるしむのは、馬鹿氣た事であると思ふに相違なからう。

けれども日没と共にその小さい靈魂は蘇つて、室の中はやがて微妙な幽玄な何とも言へない快い音樂——譬へば極小さい電鈴の鳴るときに響くやうな、薄い——銀の音色を帯びた音の漣——で充滿される、夜の更くるに従つて冴えまさるその音は、時には家全體が不思議の共鳴につれて震ひ動くかと想はるゝ程の高調に達するかと思ふと、時には極めて幽かな眼に見えぬ聲の糸かとばかり細り行くのである。しかし高かれ低かれ其聲は奇しくも物に透る性質を保つて居る。斯くてこの么微ちいさな音樂家

は終夜歌うてゐるが、唯だ曉を告ぐる鐘の音が聞えると止むで了ふ。

さてこの可愛らしい歌は戀——見も知りもせぬ果敢ない戀——の歌である。それでもいつぞや彼は見たとがあらう、若しくは知つたとがあらうといふことは、現に生存して居る有様では到底不可能の事である。幾代か前の其祖先でさへ、野原の夜の生活又は歌の戀愛的價値に就ては、少しも知ることは出来ないのであつた。彼等は蟲屋の甕の中で卵から孵化された後は、唯だ籠住居をしたのみである。それにも拘はらず、彼は幾千年このかた歌はれた如くに、今もその種族の歌をうたふ、そしてどの曲節も正しく其意味を了解して居るやうに缺點がない。言ふ迄もなく彼は歌を學ばなかつたので、それは官能的記憶——彼の幽靈が夜な／＼岡の邊の露滋き叢から鋭い音を發した時の、過去幾千萬の生活の深い靡ろげな記憶——の歌である。其時其歌は彼に戀と——並に死とを與へたが彼は全く死といふ事は忘れて了つて、唯戀のみを記憶して居る。それで彼は今歌ふ

のである——決して來ることのない花嫁に憧^{あこが}れて、

わが國でこれを『草雲雀』と云ふのは、恐らくその聲が雲雀の如く美しく、且つ常に草叢の間にゐるからであらうが、名だけ聞いても可愛^{しほ}らしくて、飼つて見たいと云ふやうな氣が起る。

* * * * *

カンタン

クサヒバリによく似てゐて、少し違つたのがある。それを世人はカンタンと呼び慣らしてゐる。形はクサヒバリと殆んど同一で、大きさにも變りはないが、翅も、脚も、頭も、黒ずんだ茶褐色を帶んでゐる。カンタンは常に草原に棲んでゐる、その發育の過程、食物その他一切の生活狀態は、殆んどクサヒバリに異つてゐない、恐らく、その變種でがなあらう。

その鳴き聲

鳴き聲は少しくクサヒバリと違ひ、彼はリイ、リイと謳ふけれども、これはズイン、ズインと謳ふやうに聞こえる。慥かラフカチオ、ヘルン氏の著書の中にも、此の蟲の聲を形容して恁う書いてあつたやうに思ふ、自分はカンタンに就いてもなつかしい追憶^{おもひで}がある。そして、それを秋の來る毎に思ひ出す、蟲

秋の日

の鳴聲を聞く毎に思ひ出す、姉を慕ひ、故郷を偲び、郊外を懷ひ、散歩を想ふ毎に思ひ出す。

それは秋の日の午後であつた。何の年かは記憶から脱してゐる。——空は名残なく霽れて、漂ふ雲の影もなく、靜かな、悟り切つたやうな日の影が、こんもり繁つた松林を洩れて、緑々とした草原の上を照らしてゐた。風は折々、吹き亘ると、木の小枝やら、雜草の葉々やらが、小搖ぎに搖いでそよ／＼と戦ぐ。コハネイナゴや、コホロギや、ミツカドコホロギの聲が、幽かにひゞく野道を辿つて、自分は巢鴨の監獄に近き櫟林に入り、それをくゞり抜けて西端に出て、寂しい日影を浴びながら草原に踞した。草木の香はふんと鼻を撲つて、自分は生き返つたやうな氣がした。手を伸ばし、胸を擴げて、思ふ様清らかな空氣を吸うて、疲れた身體を休めてゐると、何處からともなく微かな蟲聲が聞える、耳を澄ますと、それは慥かにカンタンである。聲する方に近づいて、秘と草原を撫でると、やがて、わし／＼と小さい身を綠葉の面に持上げて來た。自分には喜んでそれを捕へ、懷中から紙を取り出して包み、家に持ち歸つて飼つ

たことがある。ところが、その聲は、世の常のよりも遙かに鋭く、夜毎／＼、哀れな戀の悶えを囁いて、自分の耳を慰めて呉れた。——そして四日目に死んで了つた。

儂ない運命

儂ない運命。——四日の生存いのち。それは寧ろ此の蟲に取つて幸福であつたかも知れぬ。たとひ生き長らへて、絶間しきりもなく戀を囁いたところで、花嫁は遂に來ないのなもの。——慙う思つて、自分は哀れな蟲の骸を裏庭に葬つてやつた。木槿の木の繁つた下に。その後、自分は彼方此方と漂浪さまよつて、幾度となく寓居を替へたが、その時住つてゐた早稻田の草廬には、今になほ小さい奥都城があつて、その前に立てた墓標の面には、薄らいた墨文字が残つてゐやう。『哀れな邯鄲の骸が、大塊の膝を枕として、安らかに此の處に眠つてゐる。』

(五) ミツカドコホロギ

ミツカドコホロギ

ミツカドコホロギ(*Ioxoblemmus Haanii*, Sans.)は、コホロギと、クサヒバリとの間を行つたやうな蟋蟀の一種で、全體は暗黒色を呈してゐる。形は普通種の

その頭

コホロギと大差はないが、前額が著るしく變形して稜狀を呈し、恰度「字形」をなしてゐる、脚には**クサヒバリ**と均しく黒色の斑紋があつて、見るから優しい蟲である。

此の蟲の最も美しく、可愛い處は、その頭部である。「字形」の稜^{かど}のある、黒光りのした頭の兩端には、二つの、くりくした可愛^{しほ}しい眼が附いてゐて、その内側から纖細^{かほそ}い觸角が出てゐる。眼の周圍は少し灰色を帶んでゐるが、それが光澤ある漆黒の中にあるので、一入目立^{ひとしほ}つて見える。如何にも賢^{さか}しげな——悪く云へば狡猾^{ずる}さうな、その面^{おもて}は、誰の目にも小憎らしく映^{うつ}ることであらう。

隠れ家の奏樂

ミツカドコホロギは、常に他の**コホロギ**類の如く、家の壁や、床下や、草むらや、瓦石の下やに棲んでゐる。鳴く聲こそはよく聞こえるけれどもその姿は容易に見せない。恰度閑靜な山林に隱匿した法師が、心ゆくまで琵琶でも弾いてゐるやうで、それを聞く人の耳には、細いながらも強い刺戟を與へる。——まあ譬へれば、此の蟲の音は、破れ障子を洩れて吹き來る微風のそれの如

秋夜の寂寞

く、么微^{さ、や}かではあれど、顫震^{ふる}の中に一種の鋭い、刺すやうな、動^ともすれば、人^めを滅入^いらすやうな力を持つてゐる。

此の蟲は、靜かでさへあれば、晝間でも鳴く、けれど若し、少し騒がしくでもあらうものなら、直ぐ鳴く音を止める。ミツカドコホロギの好きな時は夜である。秋の夜が更に更けて、冷めたい大氣が世界を蔽ひ、山も、野も、市^{まち}も、家もひつそりと靜まり返つて『寂寞』ひとりその領を擴げる時、世をすねて隱匿した此の瘦樂師は、心靜かに奏樂を始める。聲は冷めたき瓦石の下から、敗れた寺院の床下から、矮^{ひぐ}い破屋の壁の間から、やがては枯れるべき運命を擔つた草叢の中から、微かにく響き傳はる。

その鳴聲

その鳴き聲は、ひよく、ひよくと聞こえる。聞き惚^とれてゐると、知らず識らず、その纖弱な音調に牽き込まれて、哀れな、悲しい感情が起つて、不遇を歎じてゐるのではないかと思はれる。長からぬ生^{いのち}の命が終を告げて、今は早や滅^{ほろ}亡^びの時の迫つて來たのを告げてゐるやうに思はれる。最後を迎へた心の悲しさに、瘦せ哀へた身を動かす力もなく、苦しい悲しい胸の思をよろくと

蹣跚く足並に合はせて、ひよろ／＼、ひよろ／＼、と鳴くやうに思はれる。人若し、蒼白い月の光りが靜かに照らす夜、荒涼たる野原の中にゐんで、此の聲を聞いたなら、必らずや堪へ難き悲愁の情に、胸の血汐の氷るのを覺えるであらう。——又若し、三日月はづかに雲間に現はれて、夕暮の薄闇の中に鐘樓の影のほの黒う見える廢寺を訪うて、その壞れた椽端に腰を下ろし、草茫々たる花園の中から、白堊剝げ落ちたる崩壁の間から、此の蟲の聲の洩れて來るのを耳にしたら、恐らく、譯もなき暗涙が流れて、双の頬邊を傳はることであらう。殊に深き憂、重き惱、悶え、煩ひに苦しんでゐる人の耳には、一入強く哀れに聞えるであらう。世と人を捨て、呪うて、その上に禍多かれと祈るやうな厭世家でなくとも、誰か此聲を聞いて泣かずに居られやう。心は鐵石の如き壯夫さへも恐らく心細く感ずるであらう。事によると、『草蟲鳴何悲——』と云ふやうな文句は、或ひは此のミツカドコホロギの聲を謳つたものかも知れない。人若し、自分に、此の蟲の標現する記號シムボルは何かと問ふたら、予は明らかに答へて曰はう、それは暗涙であると。

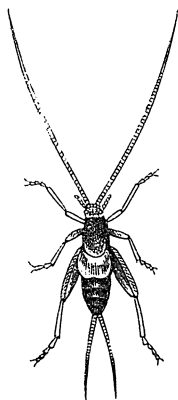
(六) カネタタキ

カネタタキ

カネタタキ(*Eciatoderes varicolor*, Sauss.) (第二十二圖)と云ふのは、コホロギ科中では、手に入れ難い昆虫である。その形は稍々スズムシの雌に似てゐるが、翅

カネタタキ

第二十二圖



松村博士原圖

人の耳には美しく聞える、世人の之を愛玩するのも無理ならぬ話である。カネタタキと云ふ名稱は、恐らくその鳴聲が、鉦を打つやうに聞えるから起つたのであらう。

カネタタキに就いても面白い回想がある。自分が七八歳の時で、もあつたらう、秋の夜を神棚の前に坐つて、繪本など繰り廣げてゐると、燈明が消え

第一の接見

て薄暗くなつた神棚のあたりで、ちつ／＼／＼と、鉦を打つやうな聲が聞える。小兒心に「あれは何なの。」と父に尋ねると、父は「あれは、鉦、叩きと云ふ蟲の聲だ。」と教へられた。

「捉つて下さい。」と迫む。

「あの蟲はなか／＼捉れやしない。」

「否だ／＼、捉つて下さい。」

「捉れやしないから、お止し、鈴蟲を賣りに來たら買つて遣るから——」

と慰められる。何うあつても捉つて下さい。」と無理に促したので、父は詮方なく踏臺をして、残る隈なく神棚の上を探されたが、蟲らしいものゝ影さへも見出すことが出来なかつた。すると、暫らく立つてから、隣の室の鎗や、薙刀を掛けた長押の上で、又してもチツ／＼／＼と鳴き始めたけれども、自分はその晩は、所詮捉へられぬものと思ひ止つたが、その翌日、二町許り離れた伯母の家を訪れた。

伯母の家は、建物は小さいけれども庭が廣くて、周圍には木槿や、道檀ツツ

阿呆の力ネ
タタキ追ひ

ジヤの籬があつて、裏の方は枳殻の生垣になつてゐた。何心なくそれに近づくと、矢張りチツ／＼と鳴く聲が聞える。刺にさゝれながら、彼方の枝此方の葉を分けて見たが、何うしても見附からなかつたので、自分は肝癪玉を破裂さして、長い／＼棒を持ち來り、頭から生垣を撲打つた事があつた。

今から思ひ合はすと、力ネタタキは小さい蟲の事でもあり、且つ跳躍甚だ敏捷であるから、逆も鈍魯どんろな小供の手に捉へられやう筈がないのである。その後大人と成つてからも、力ネタタキと云ふ蟲は、自分には一種の疑問であつたが、或る時、物の本を繙いて、

聲はすれども姿は見せぬ、み山がくれのきり／＼す

と云ふ歌を讀んで、寧ろこれは力ネタタキに改めた方がよい、キリギリスは見られるけれども、力ネタタキは容易に見ることが出來ない、試みに此の俗謠を、

聲はすれども姿は見せぬ、籬がくれのかねたゝき

と更へて見たことがあつた。聲は聞かしながらその姿は見せぬもの、鳥は初

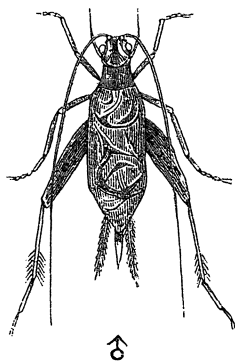
夏のホトトギス、蟲は晩秋のカネタタキに止めを刺さう。何れも姿を見せぬ爲めに、却つて懐かしく、奥ゆかしく思はれて、慕ふ心が一倍強くなるものである。

(七) マツムシ

マツムシ

マツムシ (*Calyptrichus marmoratus*, D.H.) は普通『松蟲』と書き馴れてゐるが、漢字を宛てると眞は『金琵琶』と書く相である。日本では現今マツムシと呼んでゐるが、昔はスズムシと呼んでゐた相である。すると今とは正反對で、昔は今のスズムシをマツムシと呼んでゐたのだが、それは此の蟲の鳴聲の、チンチロリンと云ふのが、鈴の音に似てゐるから鈴蟲と云つたのである相だが、昔のマツムシ、今のスズムシの聲も、リーン／＼／＼と聞えて、鈴に似てゐないこともない、殊に今のマツムシの翅や軀の色が、松皮に似てゐる所から松蟲と命名の出来ないこともないが、古と今と、名の轉倒した事は證據がある相だから、別に論議すべき必要はない。

マツムシ



圖三十二第

著者原圖

マツムシ(第二十三圖)は全體、茶褐色で觸角長く、腹は黄色い、形はスズムシに似てゐるが、尻の方が尖つて、やゝ細長い。野中の松林や、雑木の籬などに住んでゐる。『和漢三才圖會』の記す所によると、

按、松蟲、蟋蟀之類。褐色而長髭腹黃、在野草及松杉籬。夜振羽鳴、聲如言知呂林古呂林。甚優美也。凡松蟲鈴蟲、晝難得。夜照燈則慕光來、捕之畜于蟲籠。用竹筒盛水、投鳴跼草二三葉。每旦新換水及草。掃糞其屎如胡麻。大暑以後始鳴。九十月止。

とある。形の上から見ると、マツムシは、スズムシよりも可愛らしさが少ない、殊にその色彩が茶褐色であるだけに、何となく浮かぬ、沈んだ感想を起させる。けれども手に捉つて、その茶色の眼を諦観すると、無邪氣で、可憐で、頬擦したいやうな感じも起る。髭は前にも云つた通り、随分長い方であるが、一年自分雌雄の松蟲を飼つて、その動作を研究してゐた時、雌蟲は籠に止りなが

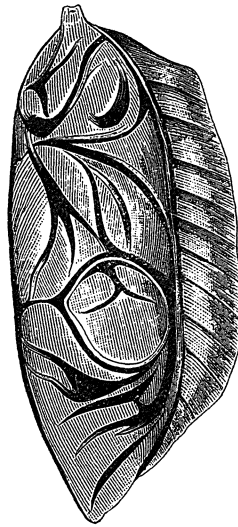
ら、觸角の基部を口に啣へたと思ふと、前肢で以てそれを抱へ、少しづゝ上方へ伸ばして、遂には離して了まつた、恐らく觸角に何か附着してゐたのを口で舐めて掃除したのであらう、實に可愛らしいことをするものだ。

マツムシ(第二十四圖)も勿論、雄蟲が鳴いて雌蟲が鳴かぬ、マツムシの雄の

マツムシの翅

♂

第二十四圖



著者原圖

その鳴聲

チロリンと鳴くと云つてゐる。自分は、

チン、チンチロリン。チン、チンチロリン。チンチロリン。チンチロリン。

とやうに少許の距てを置いて鳴くやうに思ふが、その鳴く聲は少しかす翳を帶

事を因つて發音すること、他のコホロギ科の蟲と同様である。鳴き聲は、三才圖會によれば、チロリン、コロリンと聞えるやうに書いてあるが、普通では、チン

夜の雜木林

んでゐるにも拘はらず、調子が鋭いので清らかに聞き取られる場合が多い。松蟲は概して夜鳴くのであるが、静かな時でないと決して音を立てぬ。月の夜は籬や、雜木林で鳴いてゐるのを慕つて、側近く寄り添ふと足音を聞いて、はたと鳴く聲を止めるのが慣はしである。

松蟲や我か着た簀の騒しき(杉枝)

松蟲や聞立つ程は鳴かぬ物(一草)

など云ふ俳句や、次のやうな和歌を見ると、よく此の間の消息を解する事が出来る。

草ふかみ分け入りてとふ人もあれやふりゆく宿のすゝ蟲のころ

紅葉々の散りて積れる我宿に誰をまつ蟲こゝら鳴くらむ

など何れも寂靜な夜景を配合したものでないのはない。げにマツムシの鳴き聲は、寂しい、静かな、ほの暗い月夜など、最もよく調和してゐる。野路に行き暮れて、立ち迷ふ夕烟に何う行かうかと迷ふ折節、川原瞿麥など咲いた松林の中で、チン、チン、チロリンと鳴くのを聞くと、云ふに云はれぬ快感を

惹き起す。

スズムシと
の比較

多忙の記號

琵琶の音

惹き起す。
マツムシの音は、これをスズムシに比べて見ると、發聲の間が促急で、その調曲さへ複雑であるから、それを聞くと忙がしいと云ふ様な感想が起る。然るにスズムシは、その音の間が長く、連續も長いので、何だか閑なやうな、少し眠たげな思ひをさせる。で、自分はスズムシの鳴き聲の表章する記號は、『眠たげなること』(“Drowsiness.”)だとしたならば、マツムシの記號は、『忙がしいこと』(“Business”)であらうと思ふ。又た若し兩者を色にたとへて見るならば、スズムシは紅、マツムシは黒であらう。今試みに、

すゝ蟲の音はきゝつれど亡き人にあひしは夢かありあけづく夜
の歌を以て、

秋の夜を軍に征きしわが背子の衣縫ひをるとまつ蟲啼くも
の歌に比べると、如上の對照が明らかにせられて頗ぶる面白い。實際マツムシは、コホロギ科の中でも、最も複雑な調子を持つて歌ふ小音楽者で、その調べは琵琶の大絃小絃、急に促つて、撥撥く手の絶え間もなく動くのに比べる

悲觀詩人の
曲解

ことが出来る。若し夫れ心に悶えある時、錯綜せる思想の絲を胸に纏れしめつゝ、月下の廣野にさすらひ寄つて、チン、チロリンと鳴く松蟲の音を聞いたならば、清銳の音、腸にまで沁み込んで、丹田の澄み渡るのを覺えるであらう。同時に慙くして悶えてゐるよりは、寧ろ快刀一揮して亂麻を斷つが如く、わが心の絲の紛糾を伐つて、活躍の舞臺に上らうと云ふやうな觀念が起るであらう。わが祖國の詩壇は、由來悲觀家^{ベシニスト}を以て充たされてゐる。それ故かくの如く Business のシムボルを有する マツムシ の音をも、寂しく悲しく、哀れなる鳴聲だと云つて悲しい調べもて蚤の翠丸のやうな小さい詩を呻つたものである。新日本の青年詩人は、須らく松蟲の音の『忙殺』^{ビジーネツス}を謳はなければならな
いと思ふ。

(八) スズムシ

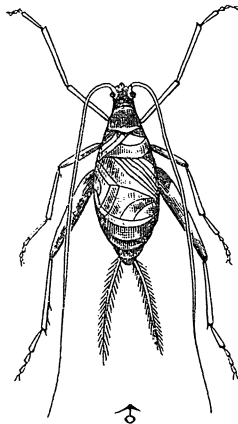
スズムシ

スズムシ (Homoeogryllus Japonicus, D. H.) は漢名を金鐘兒、若くば月鈴兒と云ふ。コホロギ科の中でも可愛らしい蟲で、人の愛玩する所となつてゐる。和名は

素とマツムシと云つたのを今はスズムシと呼び慣らすやうに成つたのである。それ故、昔の歌などにマツムシと詠んでゐるのは、これを今のスズムシと解すれば大した誤解^{さう}はない。その變遷は何時の頃か悉しくは分らないから、歌文の意味によつてこれを識別するより外に道はないのである。

スズムシ(第二十五圖)の形状は何うであるかと云ふに、體は概して雄が雌よりも大きく、身長四分位ある、全體漆

圖五十二第



松村博士原圖

を有し、雌のは退化しゆくやうな形跡を認める。その腹部を蔽へる様は雄は扁平にして雌はやゝ圓く、腹部は黒味勝の黄白色を呈し、肢は黒褐色、尾狀突起は長さ三分許り、暗桃色を帯んでゐる。『和漢三才圖會』には、

よりも大きく、身長四分位ある、全體漆黒色を呈し、頭胸部には微細なる一面の凹窩を有してゐる。頭部は小さくして尻大きく、觸角は長くして糸狀をなし、中央は灰白色を呈してゐる。翅は雄に於いて表面に著明なる紋様の凸凹

スズムシは
女性

玉蟲草紙

按、此亦蟋蟀之類、眞黒似松蟲、而首小尻大、背窄腹黃白色、夜鳴、聲如振鈴、言里々林里々林、其優美、不劣於松蟲。

と書いてある。おほざつは大雜破な書きツ振りで、とても悉敷くは分らないが實際スズムシの眞黒々とした姿、光つた、美くしい眼、臆病らしい振舞、ゼンダア性は何か、と人間は、自分は、女性です。と答へたいと思ふ。さる青年詩人の歌の中に、

いなど麻呂に鈴蟲姫のとづく夜と草みなつけぬ露の瓔珞

と云ふのがあるが、これは頗ぶるわが意を得たものである。茲かるに『玉蟲草紙』と云ふ、室町時代に出た本には、スズムシを男性に見立てゝゐる、これは玉蟲を主にしたから、此う云ふ結果に成つたのであらう。

此に近き頃、きたい優しき戀の道あり。頃は八月中の十日ばかりの頃なるに、野もせの花の色めく草の下葉に、すだく蟲のその中に、白練衣の十二單に身をまとへる蟲、かゝやくほどなれば、名をば玉蟲姫とぞ申しける。數々の蟲ども、かの玉蟲を見聞き、同じうき世に生れあひては、玉蟲姫と草の枕をならべ、薄が袖をもかさねばやと、思ひをかけぬ蟲ぞなき、餘

松蟲左大臣

り思ふも苦しきに、各玉章を通はし、歌にて心をひき見ばやと思ひけり。と云ふに始まつて、もろ蟲が思ひの丈を歌や文やで玉蟲姫に言ひ入れたが、玉蟲姫は心ある姫君のなか／＼拙らぬ蟲共に靡き給ふやうもなく、たゞ松蟲左大臣の雅びてやさしき御心にひかされて、草の枕を並べ、尾花の袖を結ばれたと云ふ段に終つてゐる。此の松蟲左大臣と云ふのは、恐らく**スズムシ**の事であらう。これは素よりお伽噺の事として、別に深い理由があつて男性としたのでもなく、また、その雅びた、優しい點は、左大臣ながら姫君のやうな心地がせられる。何れ雛様のやうな都の公卿に擬へられる**スズムシ**こそは、寧ろ女性に於いて、その比喩の適切なるを發見するであらう。

その鳴聲

スズムシの鳴き聲は、リリリン／＼とも聞え、またリイン／＼とも聞き取られる、何れにしても振顫音の一種で、餘韻は短かくはないが、最後にリ／＼と鳴き止める時、節を廻して捨てるやうに調子を下げるのは、聞いてゐても面白い。それは兎も角**スズムシ**の聲は、小さく、細く、何となく哀れに、憐れんでやりたい——一口に云へば、可愛らしいと云ふ感想を起さしめる。與謝野

可愛らしい
音色

鐵幹君の歌に面白いのがあつた、それは

玉ならば袖に包みて送らばや

わが住む野邊の鈴蟲の聲

と云ふのであつたが、他にもこれに似寄つて、スズムシの聲をデリケートだと解した歌がある。それは、

君が歌を誦せんに聲の小さしと

裾に鳴きそふ草のすいむし

と云ふので、何となく、哀れに、優しい金鐘兒スズムシの聲を謳ひ得て妙である。

振り立てゝならし貌にて聞ゆなる

神樂の岡の鈴蟲のこゑ

うつくしき萩の下かげ美しくしの

髭ふり立てゝ鈴むしの鳴く

なども亦、此の纖弱な、露にだも堪へぬやうな鈴蟲を謳ひ得て巧みな歌である。鈴蟲の聲に對する吾人の聯想は、矢張り他の蟲の如くに裏悲しく、物寂し

い。漢詩に次のやうなのがある。

金鐘兒金鐘兒。有何不平欲訴誰。切々咽露鳴不歇。通宵聽之我亦悲。驚鈍骨
苦縲繼厄。坎珂閱來年。半百一旦見白日青天。衰眼生華髮。毛白。西風月下難
爲情。起開彫籠任汝行。窮山靜谷幽棲好。勿近人間誤一生。

鈴蟲の捕方

鈴蟲を捕らうと思つたら、その鳴き聲のする杉林なり、野なりへ往つて、音
のする所に近づき、穴を見出してその側を踏むと、足音に駭かされて、鈴蟲、
すは事こそ起りたれと、遽々然と穴を出て來る、その處を手で伏せる、紙袋な
り、竹籠なりへ入れて歸る。——その夜からは裏庭なり、枕元なりで、リン
〜と音樂の合奏を始める。スズムシの音樂は、神樂歌の如く頗ぶる單調で
あるけれども、その中にまた云ふに云はれぬ妙味がある。自分は此のやさし
い姫君の歌の調べを、單に Monotony だと云つて捨てるに忍びない。

白砂糖

鈴蟲姫の最好物は、白粉である。——白砂糖の白粉である。籠などへ飼つて
置くのに、胡瓜の綿を入れて置くと、機嫌が悪くて歌はないけれども、黒い玉
砂糖でも進めまゐらさうものなら、直ぐ嬌々者でお歌ひなさるのが例であ

る。岳輅の句に『鈴蟲の機嫌をなほす月夜かな』と云ふのがあるが、自分はそれを變つて、

鈴蟲の機嫌を直す砂糖哉

としやうと思ふ、いや恁う成つては俳句も趣味がなくなつて了ふ譯だ。

鈴蟲の鳴くやころ／＼露の玉(曉臺)

すゝ蟲の蟲と知られぬ鳴く音哉(一草)

などは、よく鈴蟲の鳴く音を穿つた句ではあるまい乎。自分は思ふ、鈴蟲の聲の殊に美とせられるのは、所謂『月明星稀』の夜で、空は晴れ、大氣は少しく冷を帶び、夜露しつとり下つて草葉に月光を宿してゐる時、風は音を絶えて萬竅悉く死し、天も地も寂々寥々、たゞあるものは一の Silence 許りと云ふ時、草むらともつかず、木の間ともつかず、清い、涼しい、優しい聲で、リン／＼／＼と鳴くのを聞いたら、それこそ肉の耳も、心の耳も澄み渡つて、六根の清淨とするのを覺えるであらう。

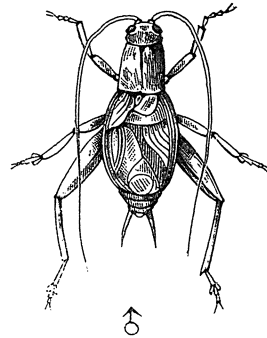
シマスズム

スズムシの一種にクマスズムシ (*Selephterus coriaceus*, D.H.) (第二十六圖)と云

沈靜なる夜
色

クマスズムシ

第百二十六圖



谷貞千原圖

リくと鳴く相であるが、普通種と何れだけ違ふのか、自分は悉しく知らない。只、参考の爲めに此處へ附見して置く。

* * * * *

一寸と御景物として云つて置き度いのは、ケラ(第百二十七圖)の事である。蝓^ラは原語を *Gryllotalpa africana*, Fall. と云ひ、コホロギ科に屬してゐるが、その前肢は地を開撥するに適當なるやう、變形して力強く、子供などが兩指を以て壓しても、それを反撥する程の力を持つてゐる。それは常に土中にゐて、小麦や葡萄の根を害するから、農家に取つては有害の昆蟲である。

ケラ

古詩一首

蟲ケラ

圖 七 十 二 第



圖 原 者 著

世人は秋の夕ぐれに、壁間、床下で、ジイ／＼／＼と鳴くのを、あれは蚯、蛭が鳴いてるんだ。」と云ふが、實は蜉蝣（ケラ）が鳴くと云ふ説がある。自分は好事家であるから、まだ實地にそれを研究して見ないけれども、蚯蛭でないとは確實である。また『文選』の古詩十九首の中に、

凜々歲云暮、蜉蝣夕鳴悲。涼風率已厲。

游子寒無衣。錦衾遺洛浦。同胞與我違。

云々と云ふ句があるから、蜉蝣の鳴くと云ふとも信じられないとはない。そのジイ／＼／＼と云ふ鳴き聲は、一言で評すれば Melancholic とでも言ふとが出来やう、何處やら沈んで、寂しくて、ついうと／＼と眠つて了ひ度いやうな感じを起させる。

世には『蟲ケラ』と云つて、非常に蔑にせられてゐるけれども、蜉蝣はそんなに拙らぬ蟲ではない、これを蛆蟲（ウジ）などに比べたら、遙かに／＼上等の動物で、顔こそ餘りよくはないが、それでも Ugly だとは云へまい、たゞスズムシなど

のやうに、Handsomeだと云ふとが出来ない丈である。前世は何であつたか知らないが、螻蛄は可愛さうにも、さも拙らぬものゝやうに云はれてゐる。何の因果か、實に氣の毒な感に堪へない。

第五章 蝗蟲科

(一) 總説

イナムシ科 (Acridae) も亦た直翅目に屬してゐるが、頭部は稍々圓く、觸角はキリギリス科、コホロギ科のものより短く、三個の單眼を有してゐる。後肢は膨大にして質堅く、跳躍を自由ならしめる力を持ち、跗節は三個、聽器は第一の腹節に附いてゐる。その雄蟲は、前翅の兩側を後肢に摩擦することに由つて、輕弱な音響を發する。此の科に屬する昆蟲は、大抵植物を食餌とするから、農夫に取つては大敵である。殊にイナゴの如きは、稻田を害すること甚だしく、年に由ると振々群を成して田面を蔽ふことがある。

イナムシ科の産卵期は晩秋である。稻も刈られて田面さびしく、日影もや

劣等なる鳴聲

う／＼力鈍り、風の音ざわ／＼と、冷つく／＼成つて來ると、雌蟲は田畑の畦畔や、道路の地下に卵子を産み付るのであるが、其年は卵の儘で超え、翌くる春に至つて孵化し、五度位皮を脱いだ後、飛ぶべき翅を生するのである。昆蟲學の知識の乏しい人々は、その幼蟲を見て別種のやうに思ふこともあるが、あれはまだ充分發育してゐない幼蟲で、次第に大きく成ると普通種のものに成るのである。

イナムシ科は、鳴く蟲として、は劣等のものである。その聲は頗ぶる單純で、調曲なく、拍子なく、たゞ無意義な聲音を連續せしめる丈で、**マツムシ**や、**ギリ****ス**のやうな美くしい調べを持つてゐない。發音機關から觀察して見ても、**イナムシ科**は劣等で、到底**ギリ****ス**科や、**コホロギ**科に及ばないのである、また此の科の鳴き聲は、鳴くと云ふよりも寧ろ鳴るので、甲蟲の翅が空氣に衝突して、異様の聲を發するのと大差はないが、その雄蟲ばかり鳴くのを見ると、鳴くのは有目的で、無意識に鳴るのでない、と云ふこと丈は確實である。

イナムシ科に屬するものは、それを**キリギリス**、**コホロギ**の二科に比べると、遙かに男性的である、その有する特質は跳躍で、跳躍の記號は、活動 (Activity) である。故に**イナムシ科**の昆蟲は、人をして勤勉 (Diligence) といふ聯念を起さしめることが多い。これは少し怪しい三段論法であるが、理窟は兎も角、實際此の科のものが、飛翔し、跳躍することの敏活なのは、到底**キリギリス科**や、**コホロギ科**の及ぶ所でない。殊に**バツタ**の如きは、高く空中を飛ぶので、子供の手には容易に捕へられない。石も熔け、草も萎れると云ふやうな炎天に、**バツタ**を追つ掛けて手に入れ得ず、汗水流して駆け歩くのは、誰しもよく見る所であらうと思ふ。また此の科に屬するものの中には、彩色が美しいので、非常に小兒の愛する所と成つてゐるものがある。飛蝗^{バツタ}の如きは即ちそれである。

(二) イナゴ

イナゴ

イナゴ (Oxya verox, Fab.) は、漢名を黃螞子といふが、是は清音で Hovanmatsu と發

音する。英語の Locust と云ふのは、慥かに **イナゴ** のことを指いて云ふのらしいが、彼方でも **ロカスト** が、**イナムシ** 科の總稱であるやうに、日本でも、**イナゴ** と云ふのは、蝗蟲を總稱しての名詞である。**イナゴ** は古くは蝻蟲と書いたものだ相な。『本草綱目』を見ても次のやうな事が書いてある。

蝻蟲は總名なり、數種あり、草の上に在るを クサイナゴ 蝻蟲といふ、冬に至つて土穴の中に入る、夷人炙りてこれを食ふ、辛く毒あり、其類土中に乳す、深くその卵を埋む、夏に至りて始めて出づ。

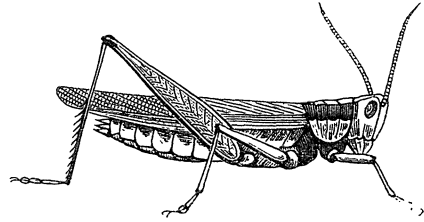
これに由つて考へて見ると、**イナゴ** と云ふのは總名であるらしい。又 **イナムシ**、若しくは、**オホネムシ** と云ふのは、**イナゴ** の別名で、別に變つたところは無いらしい。

イナゴの形
狀

イナゴ (第二十八圖) はわが國有名の害蟲であるが、形は略ぼ **バツタ** に類し、頭や、圓く、觸角短く、眼はどんよりとして、物思ふ乙女のそのの如く、色は綠色である、脚の表面には美しくしき山狀の紋様があり、前翅の前縁は恰度割つたやうに成つてゐる、例の『和漢三才圖會』には、

圖 八 十 二 第

イナゴ



著者原圖

按。蟲螽。方首。形似莎雞而小。青白色。生田稻。夜在株。朝上於梢。吞稻露。故名稻子。取之炙食。味甘美。如小鰕。

と書いてあるが、可笑しい事には、劉勰と云ふ支那人の言を引用し、イナゴの性は穀を食ふを好まぬから如何程多くても構ふことはない、稻の出来ない時は、他の理由があるのであつて、此の蟲の爲めでない、不作の時にはイナゴ自身の數も少ない、と云ふやうな事が書き添へてある。その間違なることは云ふまでも無い。

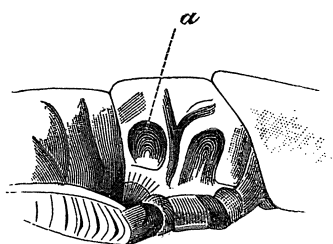
イナゴの聽器(第二十九圖)は、他のキリギリスや、コホロギと違ひ、第一腹關節にこれをも具へてゐるのである。形や、大きさは如上の蟲と非常なる差異はない。例の『本草綱目』に性、金の聲を畏ると書いてあるが、それは此の耳で聞くのである。

集合性

(a) 聽器

圖九十二第

蝗腹部



シンネル氏原圖

イナゴの性は、頗ぶる集合を好むその群飛してゐることは誰も知る所である。漢書の中に『一生八十一子。』と書いてある程繁殖力強く、群がつて田を蔽ふ時は、田は蝗蟲の池となり、飛んで天を蔽ふ時は、天は曇つて日の光りも薄くなる。一寸と見ると可愛らしい蟲だが、其の實なかく面憎いことをする。イナゴは昆蟲中でも、人間に害を與へる惡蟲で、米國ではこれを“Destructive-

insect.”と云つて非常に嫌つてゐる。唐書の中に、

太宗貞觀二年。有蝗害田。帝捕蝗曰。天若罪我。汝能害我。黎民何罪。祝畢吞之。蝗果不害。

とある、イナゴの害を恐れて、太宗皇帝が蝗蟲を呪ふた事は、黎民の上に君臨せる天子の振舞として、頗ぶる嘉すべきことであるが、それは兎も角、何れの國に於いても、イナゴの農作に有害なこと丈は分る。

イナゴの鳴く時は、前肢の兩側を、左右の脚に摩擦せしめるのであるが、かくすると、キシ／＼／＼と云ふ音を發するのである。風が吹くと草原の中からその聲が、有るか無いかのやうにほのかに／＼聞えて來て、われ等に淋しい思をさせる事が有る。夏の日を散歩などして、稻田の側を通る時、風にゆらるゝ稻葉に止まつて、搖らるゝまゝに身を据えて、靜として身動きもせぬ姿、若しくはヒヨコリと飛ぶ様と見ると、實に小憎い程の可愛らしい蟲であるが、それが害蟲だとは腹立たしい。しかし自分が神様だつたら、**イナゴ**の罪は減刑してやる、神様は今でもその罪を許して御座るので、あの蟲があんなに繁殖してゐるのかも知れない、『詩經』に

嚶々草蟲、趯々蟲蟲、未見君子、憂心忡忡、既見君子、我心則降、赫々南仲、薄伐西戎。

とあるのは、**イナゴ**の事で、これは單に將帥が萬里遠征の中に、草蟲や蟲蟲が生ずる程時物が變つたと云つて、その妻なる人の嘆いた詩であつて、別に**イナゴ**と深い關係があるのではない。

蟲送り

松明の火に一天暗し蟲送り

と云ふ俳句は、蟲送り、を詠んだのである。『蟲送り』の語はわが耳に、うつくしい調子を以て響き、自分の幼年時代を想ひ起さしめるのである。天が搔き曇つて、雲片飛び、星折々ちら／＼と見える闇の夜を、田面に松明の火が眞紅に見える、鉦や銅鑼の聲はやかましく聞える。——松明は一しきり闇を焼いて、紅の焰ぱつと燃え上つたと思ふと、やがて川中へ投げ捨てられる、それは害蟲たるイナゴなどを火に集まらしめて焼き殺し、川へ投げて了ふ積りでするので、一種害蟲の厄除式と云ふやうなものである、自分の故郷は田舎町で、一寸と出ると直ぐ田圃がある、五月雨の頃を、鉦や銅鑼の聲に釣られて、姉と共に蟲送りを見に行つたとは二三度もあつたが、それは今尚ほ忘れぬ思出の種なのである。

俳句に現は
れしイナゴ

害蟲の厄除
式

穂頭に重なる露の蟲哉(恒丸)

貝原が舟に乗込むいなご哉(同)

先へ／＼行くや蟲の草遷(樗堂)

牛の尾に取付て居る蝨哉(天外)

蟬螂の背にも負ふさる蝨哉(道彦)

濡れさうな物降りかゝるいなご哉(鶯笠)

引入るゝ馬や行燈に來る蝨(一夢)

逆もなら蝨も鳴けよ草の宿太節

などの俳句は、何れもイナゴの特質を歌ひ得て妙である。

又元へ戻つて云ふが、イナゴの鳴き聲は、すこぶる寂しく、哀れと云ふことを想起せしめる力がある。殊にそよ風の吹き來つて、草葉がざわ／＼と戦ぐ時、風につれて、そのキシ／＼／＼／＼と云ふ聲が聞えて來ると、寂寥は事實に於いて破られてゐるにも拘はらず、却つて寂寥の情を増さずには居られない。キシ／＼／＼と云ふのに、調子と云ふ程のものは無いけれども、その一種の調べある響が繰り返されると、自分はその響と共に自分の靈魂も抜け出て、風に載つて何處かへ彷徨つてゆくやうに感ずるのである。夕暮前の風涼しき時を、墓場など通りて、彼處や此處で、キシ／＼／＼と鳴くイナゴの聲

燒イナゴの蒲

を聞くと、實に淋しい感想が湧いて、歩くにも得堪へぬ思がしたこともある。
殊に可笑しいのは、イナゴを食ふ事である。かの小兒や小娘が田の畔を彼
方此方と歩き廻つて、イナゴを捕へ、それを竹串か何かへ刺し、丁度串団子の
やうにしてゐるのは、家へ歸つて焼いて食ふ爲めである相なが、書物にも書
いてある通り、味はなか／＼旨くて、下手な鰻などよりは遙かに優つてゐる
相だ。

いなごすだく田の畔の草萎るべく

風なき午を照る日の熱き

蝗捕りて小串にさしてうなゐ等の

歸るゆふべをそよかせの吹く

すい風にしら露の玉ちり落つる

いな葉の上になご躍れる

などは平凡な歌ながら、朝と午と夕とに於けるイナゴの状態を歌つてゐる
點に於いて、見處がないとは云へぬ。

此の蟲は稻田は勿論、麥畑、黍畑、又は草原などに澤山ある、極めて普通のものであるから、それを捕へることは容易である。中學生などは夏期休業の間に、晝寐ばかりして居らず、乃至は机上の研究ばかりして居らず、少つと田園へでも出懸けて往つて、イナゴでも捉へて細かな研究をして見たら面白からう。解剖器は價段の安いもので、僅か一圓許りであるから、その用ゐる方は教師に聞くなり『昆蟲採集法』といふやうな書物で調べるなりして、實行せられんことを望む。實地の研究は机上の研究に優ること萬々で、その効果も大きいと同時に、興味も亦た甚だ多いことは争はれない事實である。

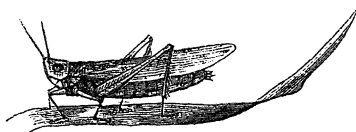
(三) コハネイナゴ

コハネイナゴ(*Oxya vicina*, Brun.) (第三十圖)は、イナゴと、略んど同一であるが、前胸部が少しも緊縮せずして平行し、その翅が短かくて幼蟲のやうであるから、一見して直ぐに區別することが出来る。此の蟲も稻田なり、麥畑なり、草原なり、到る處に澤山ある。

鳴き聲

コハネイナゴ

第十三圖



マシウス氏原圖

載すること夥だしい。

The locust called *stenobothrus curtipes*, a very common species at once recognized by its very short wings, also sings in the Campton meadows. This musician uses both legs at once, and scrapes his wing covers in somewhat syncopated time. But to distinguish his music from that of the other members of the orchestra is a difficult task. His hissing notes given out at the rate of six to a second continue for about two seconds,

英語で“Short-winged Locust.”と云ふのは此の**コハネイナゴ**の事であらう。腹尾が翅の下から長く出て、丁度短かい着物を着たやうな恰好をしてゐる。少しく滑稽趣味のある蟲で、俳句には好材料である。その鳴き聲は**イナゴ**と大差なく、ヒシ〜〜〜と聞える。英語では“Hissing note.”と云ふ。偶然一致してゐるのが面白い。その聲は馬追や、**クツワムシ**のやうに高くはないが、しかも、その低い、弱い、微かな音色の中に、一種の勢力を持つてゐて、聞く人の心を刺

then a short pause and *da capo*. This music is not nearly as loud as that of the *Orehelium*, nor as continuous; but it has the same hissing quality.

これはマシウス氏の『路傍の百姿』中に書いてあるのだが、實際此の言の通りコハネイナゴの鳴聲は弱小で、とてもその鳴き聲を草原で奏する蟲のオーケストラから、聞き分けるとは困難であるけれど、若し廣い野原が夕風の沈靜なる状態に在る時、耳を澄まして聞いたならば、吾等は明らかに此の小樂師が、ひししし、ひしししと、ひしし、節を奏してゐるのを聞くであらう。

イナムシ

昔用ひてゐた言葉にイナムシ、又はオホネムシと云ふ名詞があつた、それは確かに此のコハネイナゴの事であらうと思ふ、『和名抄』には『蝗はオホネムシに當る』と書し、『大和本草』には、

管子に凶年の五害、水、旱、風、厲、蟲と云へり、蟲とは蝗イナムシのとなり。和俗に實盛蟲と稱するあり、蝻に似て小なり、青色なり、首は兜を着たる如し、稻葉を食ひて大に害す。夜松明を燃し、鐘鼓をならしてこれを送る。

蟲送り

と書いてある。何うも**イナゴ**と、**イナムシ**又は**オホネムシ**とは、別物ではなく、
變種であるらしい。蟲送りの事については、**イナゴ**の條でも言つて置いたが、
嚴に云へば**オホネムシ**を送るのが、本統の蟲送りであるらしい。馬琴の『歳時
記栞草』には、『紀事』の文章を引用して、

年に依つて田蝗害をなす時、民人鐘鼓を撃ち野外に送る、これを蟲送と
云ふ、凡そ早歲に五穀の枯れ萎むを焼けると云ふ、茄の根の枯るゝを舞
ふと云ふ、瓜の蔓の枯るゝを上ると云ふ、これ民間の言葉なり。

蟲合せ

と書いてある。蟲送りで思ひ出したが蟲合せと云ふ事がある、それは様々の
蟲を籠の中に入れて飼ひ、晝は姿を見て楽しみ、夜は聲を鳴き合はさして聞
くのである、昔は京江戸では盛んに行はれた事、恰度、今日の鶯や目白の鳴き
合せ會のやうなものであつたらう。

自分が小兒の時、故郷なる勢田川の上流に釣して、稻田の畔や、川の堤の草
の上に集へる**コハネイナゴ**を見、友人と共に、これは**イナゴ**の子供であらう。
などゝ語り合つたが、今にして想へば、それは發育してゐない幼蟲ではなく

て、既に――發育し終つたコハネイナゴだつたのである。さるにても研究と云ふものはして見なければならぬ、まだ知識の淺く狭かつた時分には、慥かに此うだと思つた事も、知識が發達した後、充分研究して見ると、それが間違であると思ふやうなことが多い。詩人――殊に年の若い、感情の強い、理の側を忘れて情の側に偏してゐる人々は、「知識なんぞなくつてもよい！」と輕蔑の意を洩らすものもあるけれども、それは大きな間違である。早い話が、今のコハネイナゴの例でも分るではない乎。こんな風に、自分は知識の必要なこと、研究の重大なことを、今更らしく述べるのは、自分の經驗に照らして曉つたからだ。若し讀者の中、センチメンタル、テンデンシイを持つてゐて、常にインテリゲンチヤルサイドの智的方面を輕視するやうな青年があつたなら、願はくば志を翻して自己の目的を遂ぐるに必要な丈の研究をして貰ひ度い。こんな次第で、他はいざ知らず、自分だけは、StudyとLocustとの間には、一種の關係がつかれてゐるやうに思ふのである。それ故、餘談ながら聯想の綸いに釣られて、一寸と記して置く次第である。

ハタヲリ

(四) ハタヲリ

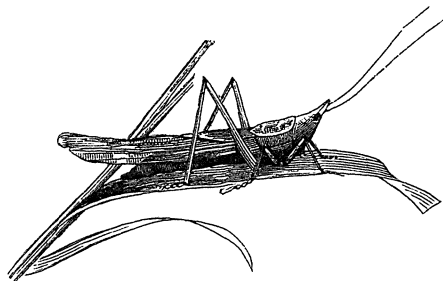
ハタヲリ (*Tyxalis variabilis*, Klug.) (第三十一圖)は、漢名を草螽または螞螽とも

ハタヲリの生態

云ふ、日本では一名をイネヅキコマロ、又は略してネギとも云ふが、或る地方ではトノサマダカとも云ふさうである。『和漢三才圖會』には、

按螞螽似螽斯而小。長一寸許。青色尖首。兩眼間廣。但螽斯兩眼間狹。以之爲異耳。其首似社人着立烏帽子狀。故俗呼曰禰宜。小兒捕兩足。則伸身俯仰。首似春稻狀。故和名曰稻春。其翅下有淡紫色。

第三十一圖



マシウス氏原圖

それは、人がハタヲリの脚を持つと頸を振つて、額づくやうにするのが、米を

搗く状に似てゐるからであらう。

英語ではこれを Cone-headed Grasshopper と云ふが、彼方でも、草原などには澤山ゐるやうである。殊にアメリカのロツキイ山の西には澤山群飛してゐる相だ。その色は淡緑色であるが、時としては藁色したのもある。頭は圓錐形で、體長く、細く、大きいものには四五寸位のものもある。その飛ぶ時などには、鋭い聲を發する。聲は恰かもヒシ／＼と云ふやうであるが、F. S. Mathews 氏は、その鳴くことについて曰はく、

ハタヲリは鋭い、摩擦音を發するが、その聲は他のキリギリス科のものと違つて力強く、俄然として聲高く、s-zip, s-zip, s-zip と鳴くが、實際あんまり美くしい聲のものではない。しかもその形は美好で、何處となく道化た處がある。ウイリヤム、ハミルトン、ギフソン氏は、之れを『元氣のよいお道化者』と呼んでゐる。

と面白い觀察である。自分は子供の時、わが家に近き草原の中で、多くの友達と共に此の蟲を捕へ、例の如く兩足を持つて首を振らせつゝ童謡を謠つた

童謡

とがあるけれども、その歌は何と云ふのか忘れて了つた。

米搗きばつた、

お頸を振つて、

おみ足揚げて、

お米搗けく一二三。

* * * * *

禰宜さまく、

お頭づんを下げて、

冠落ちたら、

何うなさる、一二三。

と云ふやうな歌であつたが、眞實何うであつたか確かにには覚えてゐない、これは絶えくなく記憶の絲を辿つて漸と綴ぎ合せて見たまで、眞實まことのは何うだか分らぬ。何しろ小兒の好きさうな蟲で、餘まり憎げな處はないが、只だ口から變な液を出すので、子供が忌がつてゐるのは事實である。

(五) ツチイナゴ

ツチイナゴ

ツチイナゴ (*Acridium consanguineus* Serv.) は、イナゴと略ぼ同形をしてゐるけれども、その色黄褐を呈し、常に田野に在つて地上に跳つてゐる。その狭背線は黄色で、大きな黄紋を胸側に有し、體は細長く、翅の表面には淡黒紋を有してゐる。『和漢三才圖會』に、

按、蟲、螽、方、首、形、似、莎、雞、而、小、青、白、色、生、稻、田、………形、同、而、灰、色、在、田、野、而、跳、地、者、即、土、螽、也、其、大、者、灰、皂、色、有、斑、大、而、莎、雞、跳、作、聲、如、曰、吉、々、

保護色

とあるのは、即ちツチイナゴの事なのである。普通のイナゴが緑色なのに、此のツチイナゴが灰黄色を呈してゐるのは、その性常に地上に居ることを好むので、自然の母が保護色を賜ふたのである。此な處にも尊い神の攝理は現はれてゐる。ウオヅヲウスではないが、野の一草一蟲を見ても、自分は感謝の念が溢れるのである。

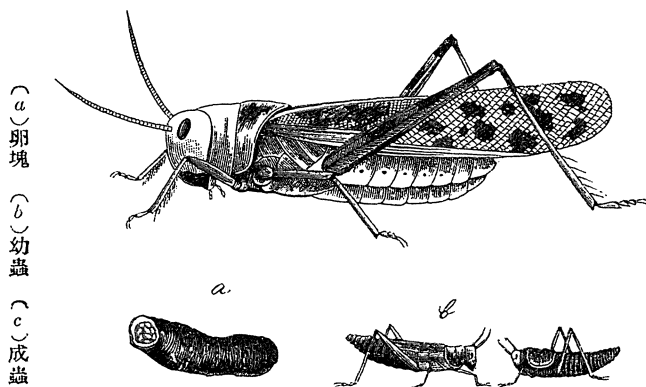
バッタ

圖 二 十 三 第

著者原圖

(六) バッタ

バッタ



(a) 卵塊 (b) 幼蟲 (c) 成蟲

バッタ (*Pachytylus cinerascens*, Fab. [Syn: *P. japonicus*, Riley.]) (第三十二圖) は飛蝗と書くのであるが、大抵の書には螻蛄と記してある。和名をハタハタと云ふ、その名稱は恐らく鳴き聲から出たものであらう。英書に “A rather large locust” と記してゐるのは、何うも此のバッタらしい。『俳諧歳時記彙草』の秋の部に、

イナゴの屬、長さ三四寸、身甚だ瘦せて、方なる首、兩額に眼あり、目の上に二つの髭あり、翅灰赤色、黒點あり、腹の下白く、善く跳りて捕へ

有名なる害
蟲

がたし。

とあるのは**バツタ**の事である。『和漢三才圖會』にもこれと同じ記事がある、同一の出所なのである。

バツタは有名な害蟲で、頭は圓くして扁平に近く、美しい緑色を呈してゐる。腿節には黒條を帶び、大腮は青色、後脛節は赤白色を呈してゐる。その赤白色と云つたら、極めて毒々しく、見るから厭な氣持がする。此の蟲は群をなすと、大害を作物に與へるけれども、爾うでない場合には別に酷い損害を與へない。或る書の中には、**バツタ**の事を“The Chief of the destructive insects.”と記してあつた、尤もな話だ。

バツタ一名**ハタハタ**は、名詮自稱、ばた／＼と云ふやうな鳴聲を持つてゐる。殊にその飛ぶ時に、鳥のやうに空高く翔り、脚の翅に觸れる度合の烈しいだけ、それだけ大きな音を發する。ある英書の中には、

A rather large locust is quite common on the intervals of the White Mountain district.

This creature flies like a bird, and snaps his wings at mill during his devious flight.

英書に現は
れし**バツタ**

He skims along with a sudden *black, black, black, black*, and gives a dip at each "black", much in the same fashion that the yellowbird utters its joyous chirrup during its undulating flight through the twilight sky. This insect is most commonly seen in the latter part of August and throughout September; it is very common on the meadows of Campton, N. H.

熱バツタと暑

その音は半ば眠たげで、半ばは忙がしげである。暑い炎天に草原の上を、ばた／＼と鳴きながら飛ぶバツタを思ひ出すと、自分は冬でも汗の出る心地がする。バツタの聲に伴ふ所の聯想は自分は暑さであると思ふ。其鳴聲は何となく暑苦しく、眠を誘ふやうな、怠けたいやうな感を起させる。或かも、單に聲そのものを觀察すると、バタ／＼と鳴く音の間は、頗る短かくて殆んど全く休止なく、連續的に繰返す(Successive repetition)やうに聞える。

ばつた飛んで百里の廣野日は午也

蟬の音に日は暮れぬ野の小家
ばつた哀れ翔れど天に昇り得ず

はた／＼や御園は廣き原にして

神殿の跡は野にしてばつた哉

などは下手な句ながら、猶ほよくバツタの棲む場處や、生活の狀態やを説明してゐる。バツタはイナムシ科の中でも、最も遠く、且つ高く飛翔するとの出來る蟲である。殊にその形細長く、體が瘠せてゐるので、一種敏捷とやうの聯念を起さしめ、はた又た活動と云ふやうな心持も起さしめる。従つてバツタは、狭い箱庭よりも、廣い／＼、果てしの知れないやうな原野に於いて、その調和を發見するのである。狭い處で翅を鼓してバタ／＼と飛んで歩いた處で、少しも調和しない。廣野か何かで威勢よく飛び翔る様を見ると、自分は其處に一種の調和が成り立つてゐるやうに思ふ。

バツタゼンダアの性は、文法上はさて置き、自分は男性だと思ふ。彼に對して、*He* を用ふるのは、何う思つても不適當である。是非 *He* でなくてはならぬ。あの飛翔、あの活動、あの威勢よさ。皆な男性的である。逆も女性の企て及ぶ可き處ではない。農作物に害のあると否とは問はず、自分はイナムシ科中では、此の男

らしい、凜々しいバツタを愛して措かぬ者である。

(七) クルマバツタ

クルマバツタ

クルマバツタ

第三十三圖



著者原圖

クルマバツタ(*Oedalins marmoratus*, Thunb.)第三十三圖)と云ふのは、バツタ王國にたゞ一人よりない姫君である。その色は綠色を呈し、後翅に於て黒帶を帶べる黃色を染めてゐる、形も色も共に頗ぶる美しく、風など吹く時に、草葉に縋つてジイ／＼と鳴いてゐるのは、實に可愛らしい、クルマバツタは之をトンボで譬へれば、慥かにオヒメトンボである。由來、英國では、バツタ類の事を“Red-legged locust.”と云ふが、それはバツタの脚が、赤血色をしてゐるからである。實際バツタの特色は、その脚が紅色をしてゐる點に在る。紅色は素と渴仰、熱望の色、それに少許の黒味を加へると、一段と沈んだ、深い意味を帶んで來る。バツタの後脛節は、即ちその黒紅色なので、觀照上、吾等に熱烈な感情を與へこそす

バツタの脚

れ、冷やかな意味には解とられない。黒紅色は、物に譬へれば血汐だ。——吁々、血汐、そんな、温かい、活い々した、とは云へ何處やら物凄いとところのあるものが、またと世にあらうか。然るに**クルマバツタ**の脚は、その血汐色をしてゐる、吾等がそれを捉へて見るとき、魅せられるやうな一種の力を感ずるのは、全くその脚が赤く亦黒く、しかも燃ゆるやうな色に染められてゐるからである。血汐のやうな黒紅色、もしそれが、紅葉のやうに鮮はとしてゐたなら、吾等はそれに酔はされて了ふだらうが、多寡が小さい**バツタ**のとして、たとひその脚を見たとして、吾等は酔はされる程強くは感じない。しかし、尙ほ好きな、望ましい、愛らしい、一口に云へば、渴かわ仰と云ふやうな念こころを起させるのは事實だ。

然るに此の蟲、姫君のあられない、飛ぶことが大好きで、よく草叢を跳り歩いてゐるが、吾等は屢々、此處彼處の草原で、草葉にすだきつゝ、微かに翅を揮つて、じいゝゝと和しく鳴くのを聞く。温翅を搏つて高く飛ぶときには、随分高い翅音をさせるが、草葉に縋つてゐる時には、極めて軽い低い音色を出す。秋の夕暮に野路を彷徨うた人々は、屢々、路端の草むらから、じいゝゝ

じいと云ふ聲の、風に誘はれてひいき來るのを聞いたことがあらう。それは此の**クルマバツタ**なのである。此の蟲の鳴聲と、**コハネイナゴ**のそれとは、往にして聞き間違へることがある、けれど此は、彼に比すれば遙に鈍く、しかも濁りと、翳れとを帶んでゐる、彼が若し笛の音ならば、此は太鼓のそれである。又勢ひよく翔る時の音は、高く鋭く、四邊にひいて、殆ど**バツタ**と異^{ちが}はない。

(八) ヒシバツタとノミバツタ

ヒシバツタは學名を *Letitia japonicus*, D.H. と云ふが、その形は普通の**バツタ**よりも小さくして菱狀をなし、前胸は甚だしく伸長し、前翅の位置を占めてゐる。よく温床などにあつて、茄子の若芽を食ひ、害を加へることが少くない。これも**イナムシ**科のことゝて、とても「害蟲」の惡名を免れないけれども、軀體が小さい丈に、普通の**バツタ**よりも憎氣が少ないやうである。玄かし何故、**バツタ**は皆な、此の様に農作物を害するのであらう。前世は鍬の尖金^{さきがね}か何かであつて、農夫に酷使された報酬に、今世では**バツタ**に生れて、汗水流して彼れ等

が作る農作物を食ひ盡さうと云ふのではあるまいか。

* * * * *

ノミバツタ

ノミバツタ (*Tridactylus japonicus*, D. H.) は極めて小さい種類であつて、その色黒褐を呈してゐる。前胸の背片は膨大して、球狀をなし、びんくくと能く跳ね廻るので、容易には捉へられない。その名を**ノミバツタ**と云ふのは、恐らく、形が小さくてびんくくと跳躍すること、宛がら蚤のみのの如くであるからであらう。何でも小さいものは、可愛らしいと云ふ感想を起させるものであるが、殊に同一種族の中に、同形で大きなものがあると、それに比較する事に由つて、一入可愛らしさが増すものである。わが**ノミバツタ**君の如きも、たしかに其一人で、小形なるが爲めに“pretty”と云ふ感想を起させるが、天性餘りに敏捷に過ぎ、びんくくと跳ね廻るので、小面憎いと云ふやうな感じもするが、それは寧ろ羨望の念に伴ふ感想で、小面憎いと云ふ中には、愛らしい、あんなに飛んで見度い、けれども飛べないから仕方がない、彼奴は實に面憎い蟲だ。といふ羨慕の念を含んでゐるのである。實際自分は**ノミバツタ**を見ると、何時でも

小面憎さ

『不羈、倜儻』と云ふ様な言葉を思ひ出して、彼の性格は、この四字に云ひ盡されゐると考へる。

第六章 滿洲の蟲

(一) 序言

滿洲の蟲

日露戦争に際して、自分は幸か不幸か、『輜重輸卒が兵隊ならば蝶や蜻蛉も鳥の中』と云はるゝ輸卒に徵發せられ、長らくの間滿洲で勤務に服してゐた。前世からの約束と云ふのでもあらうか、此の歌の通りに蝶や蜻蛉と心安くなり、遂に昆蟲研究の志をさへ起すに到つた。で、辛い、苦しい、忙がしい――身の、少しでも閑があれば閑を偷んで、直ぐ附近の草原に赴き、様々な昆蟲を採集したが、遺憾ながらその種類は甚だ少なかつた。今左に、曾て記して置いたものゝ中から、十種だけを摘記して見るとにした。この中には鳴かないものも這入つてゐるが、彼の地の蟲は何んなであらうと、好奇心から研究したがる人もあらうから、省きもせず、に附見して置く。(學名と滿洲の俗名とは

非常な相違があるから、讀者はその心して讀まれんことを祈る。

(二) 促織ツウズイ(キリギリス)

Platycleis Bonneti, Boliv.

それは六月の中つ方であつた。自分は催家堡サイチャブの新戦場を過つた。第八師團が非常な惡戦をして殆んど全滅した處で、房屋、牆壁ことごとく彈痕を印し、恰度蓮の實を見るやうであつた中には、彈丸に中つて半から挫折へしをれた木もあつた。その附近には多くの斃馬が埋めてあつたが、それが雨風に曝され、狗に掘り出されて、白い髑髏や、灰色の肋骨やが、緑の草の中からほの見え、風の亘る毎に紛々たる臭氣が鼻を衝いて、靜としては居られない程であつた。籬落の中に入ると、惡臭こそは來らざれ、棄てられた靴襪、套服などが泥塗れに成つて、彼方や此方に散らばつてゐる。目を舉げれば家は壞れ、牆は崩れ、はるばる夏の廣野を超えて元の古巢へ慕ひよつた燕子は、ゆくべき處を失うて彼處此處と彷徨ひあるき、家雀兒は亦屋上屋下に飛び移つて、二番巢の選定に困じ果てゝゐる。夫の瀧本軍醫が『歸來燕子巢無屋。片々低迷戰後村。』と謳は

廢屋のキリス

れたのは此の邊のとであらう。

暫らく行くと一軒の廢屋、土塀は崩れて雜草茫々と生ひ茂り、早咲の益母蒿^{ホー} (Ajuga decumbens, Thunb.) が小さい赤紫の花を着けて居る。塀の中は元と蔬菜園で、いもあつたらう、畝の跡は残つてゐるけれども、蔽ふばかりに野生の麻子^{マザ}と高粱^{カオリヤン}とが生えて、今はもう三四尺も伸びてゐる。自分は何とはなしに、『廢園蟋蟀鳴』といふやうな句を思ひ泛べて、ぼんやり其處に立つてゐると、そよ吹く風のまに／＼、ギイ／＼／＼／＼と鳴く蟲の聲がする。はて、變だな、何と云ふ蟲だらうと、耳を傾けて聞くと、それは確かにキリギリスである。日本のはギイスチョンと鳴くけれども、滿洲のはチョンを附けること極めて少く、數回ギイ／＼／＼と續けて置いて、最後にチョンと附ける。無論その聲はバスで、ソプラノや、アルトに屬すべき音色ではない、聞いてゐても何となく悲しい、哀れッぽい感想を起させる。キリギリスの形(第八圖)は日本のと大差なく、只だ僅かに少し小形だと思はれるまでだが、翅や軀の色は緑色のものが多くて、所謂アフラは一疋も見なかつた、何故此の蟲の音が、悲哀の

キリギリスの鳴聲

聯想

情を聴者に起させるか、その心理的説明は何うつくか、そんな問に答へるのには、深い研究を積まなければならぬ。夏は豐盛の時期で、秋や冬に比べると寧ろ樂觀さるべき性質を持つてゐる。それにも拘はらず、斷續する、低い、翳れたキリギリスの聲を聞くと、十中の八九までは淋しい、濕つぽい、哀れな感想を起す。自分は思ふこれは恐らく、聯想が手傳ふからであらうと。早い話が、昔の詩歌を見ても、コホロギや、キリギリスやは、いつも悲しいものとして謳はれ、その配景には、悲しい、沈んだ風景を描き出してある。況して自分の聞いた時は戰後、處は廢村落、——壞れた家の前——崩れた塀の内——荒れた畑の裏——聞いた人は病弱な輸卒たる自分であつたから、一入悲しく思はれたのであらう。

キイツの詩

地上の歌は曾て絶えざるなり。

寂しき冬の夕まぐれ、

霜ふりて静けきとき、

爐の側に鋭き蟋蟀の聲きこゆ。

草葉しげれる小山の蝻蜥は、

聲も惜まず鳴き續けて、

眠より半ば醒めたるものゝ如し。

(The poetry of earth is ceasing never :

On a lone winter evening, when the frost

Has wrought a silence, from the stove there shrills

The Cricket's song, in warmth increasing ever,

And seems to one in drowsiness half lost,

The Grasshopper's among some grassy hills.)

眠たげなる
聲

これはキイツの『ちりぐすの歌』(“The Cricket and the Grasshopper”)の一節で、**キリギリス**の聲を眠たいものゝやうに云つてゐる。由來、西洋人の見るところは東洋人の觀るところと異つてゐて、蟲の音に對する感情などでも、彼此の間に非常な相違があるやうである。併し、**キリギリス**の聲を聞いた時には、吾

等とてもキイツのやうな感想は起らぬこともない。實際、眞夏の熱い盛りを、鳴きしきる此の蟲の聲は、半ばは醒め、半ばは眠れるが如き感じを起さす。

(三) 蠅々(クツワムシ)

Mecopoda elongata, L.

過ぐる七夕の夜であつた。星合の空を眺めるのに厭いて、高粱の間を通り抜け、紅蓼の花夜目には灰白う見える沼地の側を過ぎ、黄豆の畑の中をゆくこと一町許り、空を仰ぐと、天の河は明らかに中空に横はり、次第／＼に西に流れてゆく。ふと耳を澄ますと、變な蟲の音が聞える。

「噯呀」と、覺えず、支那語で叫んで、よく聞いて見ると、クツワムシに似てゐるが、何うも少し違ふやうである。何んな形をしてゐるか捕つて見度い、鳴く聲は確かに、少しクツワムシとは違ふが、併しその形は何うか知ら、——こんな疑を挟んで家に歸り、張清生チャンチンヂンといふ小兒を拉へて聞くと、それは蠅々と云ふ蟲だと答へる。で、是非一つ捕つて呉れと頼んだ。

翌くる朝張は高粱程で造つた籠子ロンザの中へ一疋の蟲を入れて持つて來た。

蠅々

これが卽はち蠅々であつた。『蠅々』は恐らく當て字で、眞は『聒々兒』と書くのであらうか。その鳴き聲がゴア　　と聞える所から、寫聲的にそれを名につけたので有らう、日本の或る地方で、マツムシの事を、チンチロリンと云ふが如く、蠅々と云ふのは、その鳴き聲から採つた俗名であるとは疑を容れない。

蠅々(第十三圖)は形に於いて、日本のクツワムシとは頗ぶる異なる點が多い、その最とも酷い點は翅である。身長約一寸五分、全身綠色にして諸處に灰色の小斑點を有し、翅は大きくして三角形をなし、背の一部は扁平である、翅面に紋様のあることは、キリギリス、ゴホロギなどと大差なく、何方かと云へばわが國のヤフキリに似てゐる。常に草間に棲んで、最と忙しげにコワ　　コワと鳴き、夜も晝も時を選ばない。

高粱稈の籠

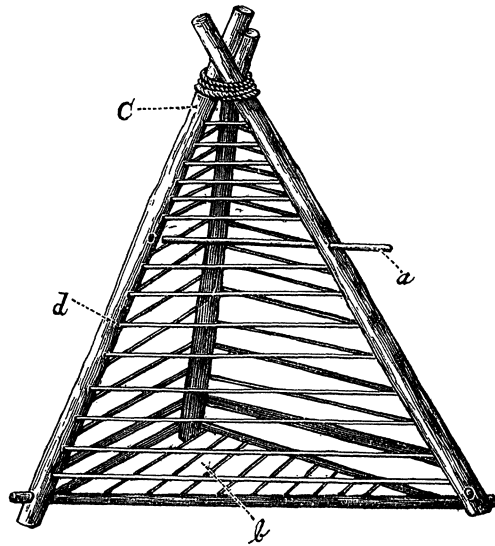
序だから云つて置くが、高粱稈の籠子(第三十四圖)は頗ぶる珍らしい。形は三角形で、細長く、左右上下共に高粱稈を組んで造るのだが、桁は稈の心で緯

* * * * *

滿洲の蟲籠

著者原圖

第三十四圖



(a)出入口 (b)底 (c)桁 (d)緯

る。日本でも此方法を利用したならば、難作なく籠を作ることが出来、子供でも別に困難は感じないであらう。殊に小児にかゝる工作的動作をさせる事

はその外皮を用ゐる而して三角形の最上部は、三本の桁を組み合はし、苧紐か何かで括つて置く。又た緯は一本丈長くして、拔差を自由にし、其處から蟲や餌やを出入させる。底は矢張り高粱稈の外皮の堅い部分で造るのであるから、四邊共に風透しよく、霧を吹きかけるのに都合がよい。食物は大概西瓜と南瓜の花や、胡瓜の綿やを遣つてゐ

は、手工的の興味を起さしめて、教育上裨補するところも尠くはあるまいと思ふ。

(四) 屎吮螂(マグソムシ)

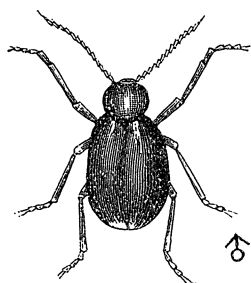
Onthophagus ater, wat.?

郵便脚夫

郵便物受領の爲めに野を越え、丘を越えて、三里餘りある長山堡へ行きての歸るさ、重荷に肩を痛めながら、輸卒は辛いもの、何でも遣らされるなどと考へて、露繁き道草を踏んで先を急いだが、如何にも堪へ難く成つたので、小

キマワリ

↑



第三十五圖

著者原圖

高い隴に腰を下して憩ひ、『汗の清水は野に流れ、
勞働の香は土に浸む、ひとり詩人の手控は、賤がい
のちは歌はれよ』今悠うして汗を流すのは後の爲め、
聽て來む快樂の時には懷かし思ひ出の種となるであらうと、
俯向いて下を凝視すると、二疋の蟲(第三十五圖參照)が圓形の或物を轉がして、何處かへ運んでゆく様子である。熱く視れ

二疋の蟲

ば圓形の物は馬糞を固めたので、無論それを食料にするらしい。人が來ると驚いた風をして飛び去つたり、又は少し退つたりするが、少焉すると機を見て戻り來り、又してもころ／＼と轉がし始める。自分はそれを見て、引いたり押したりするのは夫婦であらうが、夫婦して共稼ぎとは面白い、柔^{やさ}しい、懐かしい蟲だ。妾手懸を養つて花よ蝶よと愛^めで狂ひ、野蠻極まる折花攀柳に家庭の平和を敗りつゝある富豪連に、一眼でもこの様を見せて遣り度い。と恚う思ひ續けて茫洋してゐる前を、一人の清人がいそ／＼と通り合す。

「^{ニイヤ}僂呀、^{チヨ}這是甚麼蟲^{チヨ}、^{ツオン}自分は件の蟲を指さして尋ねた。

「^{チヨ}這是屎吮螂^{シイスウコアラシ}、と答へて清人はさも忙がしげに歩み去つた。

屎吮螂を自分は日本で見たことが無かつたが、或る人に聞くと、「片田舎へ行けば澤山ゐます。名は何といひますか、本統のとは知りませんが、私共の方では確かマゲソムシと云ひましたッけ。」と答へた。此の蟲の馬糞を拿去する時は、一疋が推し、一疋が引張り、凸所でも凹所でも、一切構はず轉ばして行く。而して、その推したり牽いたりするのは、恰度ハサミムシのやうに前脚を用

ふる。見れば見るほど愛嬌のある甲蟲で、面白いは面白いが、その汚いのには閉口せざるを得ない。蟲の色は濃厚な黒褐色で、頭翅共に堅く、全身の常に泥に塗れてゐる點は**ドロカツギ**と似てゐるが、形は寧ろ**キマワリ**(第三十五圖)に均しい。事に由ると**マゲソコガネ**(*Aphodius Solskyi*, Har.)の變種であるかも知れぬ。

石もとろくる炎天を、

雌めと雄をと共にいそしみて、

餌はこびゆく甲蟲よ、

とはに親しめ睦まじく。

人は寒さに凍ゆれど、

汝は籠り居ゐの地ちの下、

深き穴にし語らひて、

温ぬるかき家庭いへ作るべく、

(五) 片擔勾(ビヤンタゴウ)(ハタヲリ)

Tryxalis variabilis, Klug.

或日の夕暮に少しの閑があつたので、例の通り植物採集に出懸けた。今將に落ちんとする夕日、前方に見ゆる村家の一角の夕映、南西の空の夕焼雲、これ等が紅と金色とをそめて、天の光榮を色彩に現はしたやうな時、とある沼澤の側で、始めて——眞に始めて鴨跖草(*Commelyna Communis*)の生えてゐるのを見た、自分は今まで此の草は滿洲にはないと思つてゐたのに、それが藤紫の花をつけてゐたので、嬉しさの餘りその場に韙(ヒツ)乎(カ)と腰を卸して、心ゆくまで眺めてゐると、ひよこりくと一疋のハタヲリ(一名コメツキバツタ)が飛んで來た。滿洲では此の蟲を片擔勾(ビヤンタゴウ)(第三十一圖)と云ふ形態は少しも日本のと違つてゐないけれども、色は少し浅いやうに思はれるが、何しろ夕暮の朦ろげな視力では、分明と見分け難かつた。それにつけても、自分は草葉にひとしい保護色を、これ等弱い動物に與へ給ふた神の御心を思うて、秘かに攝理の圓滿遍在な事を謝した。

ハタヲリ

滿洲の蝶類

ミドリシジミ

(六) 蝶 (テフ)

Lycenidae.

蝶類は日本に比べると、その數頗る少ないやうである。自分の見たのは、僅

ミドリシジミ

かに二種類に止まり、且つその度數も極めて少ない。一は小さい灰色ので、日本のミドリシジミ

(Thecla japonica, Mur.) (第三十六圖) と云ふのに似通

ひ、一は樺色で、日本のベニシジミ (Polymnatus phle-

us, L.) (第三十七圖) と云ふのに均しいが、灰色のは

少くて、樺色のが多いやうであつた。滿洲では、春

とも云ふべき季節は頗る短かく、髯に氷柱の下

る冬から、急突に石の熔けるやうな炎天に移る

ので、ひら／＼と花間を舞ふ胡蝶の、やさし

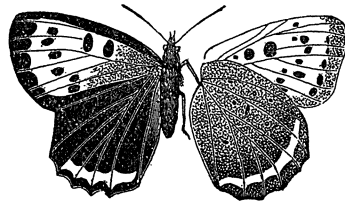
第三十六圖



フライヤア氏原圖

い姿は見られなかつたが、よし見やうと思つたとて、荒漠たる滿洲の原野では、そんな優美な繪畫的ビクテニアレスクな景色を眺めることは出來ないのである。淋しい一

第三十七圖



Pieris delius

もとの蒲公英に、淋しい一つのはなれ胡蝶！これが満洲に於ける春季の代表的光景である。自分の蘇胡堡にゐたとき、嘗て寂しく新墳の邊りをそいろ歩きして、墳畔に咲いた鵝令食 (*Urtica debilis*, Maxim?) の花に、假りの宿りの小

蝶を見て、云ふべからざる寂寞を感じたことがある。その時、自分は、壯大なる光景の裡に沒了せられん程の纖細は、却つて有功に人の感情を刺撃して、一種の寂し味を感じせしむるものだと言ふことを知つた。

ブライヤア氏原圖

魂香花(ヲトコヘシ料斗花)ニセムラサキ?

(登骨魯花)ネコ

を常とし、花の咲く處、時に樺色せる蝶々の飛ぶのを見る。併し最う八月と云へば朝夕は涼しい、晝こそ路上の土砂を熾くべく、吹く風を燠からしむべき處の墓場、榆の樹の暗綠色の葉の茂る下蔭には、野

ベニシジミ

暑熱だけれども、日の出でんとする前、日の落ちたる後は、いと涼冷で、所謂『新涼似水』の概がある。或る朝のさすらひの草原露しげき記吉草チチサウ（鳳仙花）の花にすぎしベニシジミの翅の萎れに、吾とわが身の運命を占つて、行く末頼み難い思ひのした事があつた。——自分の畏敬する白面黒髯の少壯將校辻中尉の訃を聞いたのは實にその夕であつた。——その時、自分は獨り心で思つた世の中に胡蝶ほど果敢ないものはない、その生命は、花や葉の上に置く露と孰れど、雙々飛びしは短かな春の夢、過ぎにし春の日の果敢なき夢。あゝ何を覓めて營々として、しかく舞ひを舞ふのである乎——。

蛺蝶趁花迷後塘 薰風吹綠褪紅粧。

誰憐閔凶無依軀。終日翩々尙覓香。

蝶の分布

北は千島の果より南は臺灣まで、世界を掌上にすべく作られたる地球儀に於いてすら、一寸の長さを有する日本のととて、昆蟲なども彙類は頗ぶる多いけれども、南關東州コワントンチウより、北昌圖府シヤントウフに至るまで、變化もなく、曲折もなく、扁平、單調なる滿洲に於いては、わが國のやうに幾百種の胡蝶を看出すべくも

ないのである。

(七)

蟋蟀チユインアイ(コホロギ)

Grylloides berthellus, Sans.

満洲ではコホロギチユインチヨ(第十六、十七圖)の事を曲々と云ふ。大小二種あるが、大なる方はトシグスウ螽斯と云ふとの事、併し當には成らない。兎に角小さい方は、雄蟲に於いて頭部が尖角を有し、翅に於いて多くの旋渦狀紋様を帶んでゐる。恐らく

その鳴聲

月夜コホロギを聞く

日本のミツカドコホロギ (*Loxoblemmus Haani*, Sans.) と同種であらう。此の蟲は姿を見せること少なく、秋の近づくに随つて屋房近く寄り來り、床下に隠れ、壁間に潜んで、キリキリフウ、キリキリフウと啼くのである。支那人はその鳴き聲を形容してチロくくくと鳴くと云ふけれども、自分には爾そなには聞えぬ。その聲は聞く者の心々で、何どうにも感ずるだらうけれども、自分には悲しい、哀れっぽい感情を起させるのが常だ。で、その音聲は、これを夜に於いて聞くのが最もよく調和してゐるやうに思はれる。露營の月夜、疲れて一寢入したものの、冷えまさる夜氣に夢破られて、頭を擡げると、青白い顔の月はわが

部屋を覗き込んで、しとやかに故關の事情を語る。麥酒瓶を打割つて作つた風鈴と調和を保つて、屋外六尺の蒿原では荐りに蟲が鳴く。それを聞くと、イサアを傳はる波動が、ぶる／＼と微小の震動を皮膚裏にまで傳へて、沁々と腹に浸み込むやうで、自分は覺えずきり／＼す夜寒に秋のなるまゝに弱るか聲の遠ざかりゆく』と云ふ古歌を誦んだこともあつた。此の間の情懷は我と我が情懷ながら、何うして起るものやら、また如何なる位地に在るものやら更に分らない、まるで混沌として夢かのやう！ 逆も心理的サイコロジカルな説明を與へることが出来ない。

病院の月夜

殊に感慨の深かつたのは、自分が病氣の爲めに後送せられて、遼陽兵站病院にゐた時であつた。想ひ起す——下弦の月夜、靜かに病室を抜け出で、右手に淡黒く聳ゆる喇嘛塔の姿を見つゝ、逶迤たる小山の裾を縫うて東の方へ歩んでゆくと、散步區域の盡くる所に、一字の廟ムウがあつて、二三の樹木が蒼蒼たる影を地に印してゐる。その後方には草原が開けて、團露今まさに月光に白し。

淋しい夜ではないか。

耳を傾けて聞くと、彼方の小雑樹の茂みには自からなる音楽を奏で、他處目もふらぬらしき蟲の聲。その聲は確かに**コホロギ**である。心を落ち附けて靜聽すると、聲の調子が頗る悲しく、自分には『ついにこれだ』とは聞えずして『日々』——ほそりゆく——』と謳ふやうに聞える。あゝ爾自身に説明する如く、日々に細りゆく爾の聲、病の爲めに還送せらるゝわが身の上に似てゐるではないか、哀れげな音をふり立てゝ、蟲よ願はくば、今宵鳴かざれ。もとより悲觀に傾き易いわが感情が、爾の爲めにどんなに悲觀に傾くかを思へ。時々鳴くなゝ泣き止めよ。何が悲しくてそんなに鳴くのだ、妻に別れてか、友を喚んでか。恚う呟いたと思ふと、又他の考が湧いて来る。——由來自分は冷やかな科學者が、冷やかな説明を鳴く蟲の音に對して下すのを好まぬ、自分は唯だ自分勝手に様々の空想を回らして、蟲の心中を忖度すれば可い——恚う考へながら倉庫の後の方へ廻ると、草原は盡いて沙原となり、鳴く蟲の音は耳には入らぬけれども、耳の底には尙ほ、其の調べある音色が残つて

死の聯想

ゐて、淋しく悲しく響くのである。何時歸れる事か、病氣は癒えるだらうか、若しや、あの、あの二三日前に、何した人のやうに、哀れなく、最期——人生の最も悲しむべき死に陥るやうなとはあるまい乎。と思つてゐる中、いつしか身は病室の側に來てゐた。談笑の聲も今は杜絶え果て、彼方娛樂室の燈光幽かに、夜は闇森として月光淡し、自分は覺へず、口走つた、何と寂寥な夜ぢやないか。Death, death, death — コホロギの音は確かに、死を誘ふ聲だ。

(八) 蝓子(バツタ)

Pachytylus cinereus, Fab.

バツタ

蝓子(第三十二圖)といふのは、蝓の事である。けれどもこれは普通種と違ひ、色は灰色で、蝓の大きいやうなものであるが、日本の或る地方ではクリダカと云ふ。形は少し日本のより小さいやうに思はれたが、何れも此れも皆灰褐色で、彼の緑色の、美くしいのは只の一度も見た事がない。これはよく高粱畑に飛んでゐるが、その害蟲たることは云ふまでもない。

ヤブキリ

(九)

三叫驪サンヂョウリ **ヤブキリ**

Locusta japonica, Brun.

三叫驪サンヂョウリは馬追蟲に似てゐるが、腹部が少し小さく、嘴の鋭い點が異ふ、丈高からぬ芝草原に群がつてゐたが、日本のやうに樹上などへ上ることはないのか、只の一度見た許りであるから、到底その生活状態を窺ひ知ることが出来なかつた。

(一〇)

蝗ホワン 螞子マーズ **イナゴ**

Oxyverox, Fab.

イナゴ

滿洲縦貫三千里、野は廣いけれども、稻の作られてゐる處は少ない、上陸以來自分は只だ一度、昌圖府シヤントウフウの後孤榆樹堡ホウクウ ユウシユウブに於て陸穂をカホを見た許りである。で、日本ならば、稻に群がるべき**イナゴ**は、皆な稗や、粟や、高粱やに集つてゐる。**イナゴ**(第二十八圖)こそは少しも日本のと違つた處はないが、野面が空濶な故かその數が餘り多からぬやうに見受けられた。南米に在つては天日を蔽ひ、日本に於いては水田を壓する**イナゴ**が、支那に來つて、僅かに一鋤の稗子イナゴ畑を

覆ふことすらも出来ない。時の不利か、地の不利か、蝗蟲に取つては存亡の大問題である。

(一一) 螞蟴(トンボ)

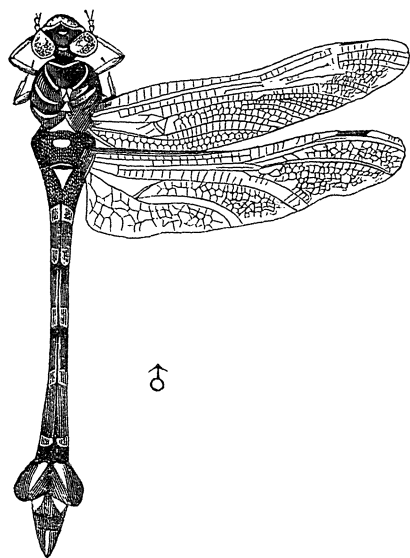
Libellulidae.

アカトンボ

雁蛋泡ヤシタンバウから小子河セウズウハを超えて、小塔子セウタアザの方へ行かんものと、水筒の温湯を頼りに、夏の眞晝を、てく／＼と

歩くと、やがて遼河の岸近く來た。一路の細流、土沙質の平地を貫ぬき、水は流砂の爲めに濁つて底見えす、兩岸の青蘆三尺、日は正に午なるの時、一羽の紅螞蟴ホウシマテ *Crocothemis servilia* (Dun.) が蘆の葉の上に止つてゐた。

圖 八 十 三 第



松村博士原圖

ボウチワトン

青蘆三尺赤蜻蛉に日は眞^ま正^と面

暑き日を動きもやらず赤蜻蛉

これは日本のアカトンボである。その他、普通のムギワラトンボや、キトンボやは、つい一度も見た事がなかつたが、所謂ヤンマ(*Anaxparthenope*, *Selys*)なるらしい、満洲ではその事を青^{チン}螞^{キョウ}螂と云ふ。

或る日の夕べ、隊長に差し出すべき報告書が、日暮れてもまだ脱稿しなかつたので、北窓の下で空箱を臺に懸命に成つて認めてゐると、一疋のトンボが飛び込んで來た。恐らく蚊でも追つ駈けて來たのであらう。捕つて見るとウチワトンボ(第三十八圖)で、少しも日本のと異つた處がなかつた。

(明治三十八年九月十六日於大連記)



鳴く蟲の研究
終

明治四十年八月一日印刷
明治四十年八月五日發行

鳴く蟲の研究

正價金五拾錢

著者 西村眞次

發行者 篠崎純吉

東京市京橋區北槓町二番地

印刷者 本間季男

東京市本所區番場町四番地



發行所

東京市京橋區北槓町二番地
電本二六二三番振替口座七四九二番

大阪市東區南本町四丁目五十番屋敷
電東三三八四番振替口座二六二二番

參文 積文 舍社

帝國理科大學牧野富太郎先生校訂 東京博物學研究會編輯

●普通植物圖譜

每月一冊發行 十冊既刊
每冊正價三十五錢 送料四錢

理學博士石川千代松先生校訂 東京博物學研究會編輯

●普通動物圖譜

每月一冊發行 五冊既刊
每冊正價五十錢 送料二錢

牧野富太郎先生校訂 東京博物學研究會編輯

●野外植物の研究

四六判總クロース綴全一冊
正價金壹圓貳拾錢 送料八錢

●續野外植物の研究

近刊

●面白き植物

菊判全一冊 正價金三十錢
送料六錢

●實用學校園

附園用植物圖

四六判全一冊 正價金三十錢
送料六錢

東京博物學研究會編輯

●益蟲物語

菊判全一冊 正價金二十錢
送料六錢

西村醉夢先生著

●鳴く蟲の研究

クロース綴 正價金五十錢
菊判全一冊 送料六錢

